

序 章

神と絶対真理者の概念は同じではありません。『シュリーマド・バーガヴァタム』のターゲットは絶対真理者にしぼられています。「神」という言葉には「支配者」の意味が含まれていますが、「絶対真理者」という言葉には、至高善、あるいは「すべての力の根源」という意味が含まれています。「姿のない支配者」はありえませんが、「神は支配者として姿を持っている」という説に異論を挟む余地はありません。その考えを現代の政府、特に民主政府にあてはめると、ある程度「非人格的」なイメージが感じられますが、つきつめて考えてみれば各大臣の筆頭者は一人の個人であり、政府全体のイメージはその筆頭者のイメージで決まります。このように、「他者を支配すること」について考えると、そこにはかならず個人が存在していることがわかります。さまざまな管理職にさまざまな支配者が就いているのですから、数多くの小さな神がいる、と言いかえることもできます。

『バガヴァッド・ギーター』は、ある種の非凡な力を持つ支配者を *vibhūtimat sattva* (ヴィブフティマトゥ サットウヴァ) 「主に力を授かった支配者」と表現しています。さまざまな能力をそなえた多くのヴィブフティマトゥ・サットウヴァ、支配者あるいは神々がいますが、絶対真理者は一人しかいません。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、絶対真理者あるいは至高善を *param satyam* (パラム サッチャンム) と呼んでいます。

『シュリーマド・バーガヴァタム』の著者シュリーラ・ヴァーサデーヴァは、最初にこのパラム・サッチャン(絶対真理者)に敬意を表しており、またすべての力の根源であることから、パラム・サッチャンは至高の人物です。神々、すなわち支配者たちが人格を持つ存在であることに疑いの余地はありませんが、神々たちに支配力を授けているパラム・サッチャンは至高の人物です。サンスクリット語の *īśvara* (イーシュヴァラ) ・支配者は神を指していますが、至高の人物は *paramēśvara* (パラメーシュヴァラ)、すなわち至高のイーシュヴァラと呼ばれます。至高の人物・パラメーシュヴァラは至高の意識を持つ人物であり、別の源から力を得てはいないため、だれにも依存しない独立した立場にいます。ヴェーダ経典は、ブラフマーを最高の半神、あるいはインドラ、チャンドラ、ヴァルナのようすべての半神の筆頭者として述べていますが、『シュリーマド・バーガヴァタム』は、力と知識の面では完全に独立しているわけではない、と説明しています。ブラフマーは、全生物の心にいる至高者からヴェーダという形で知識を授かりました。その至高の人物は、一切万物について直接・間接に知りつくしています。最高人格者の部分体で、ひじょうに小さな存在である個々の魂は、自分の体・姿・形について直接あるいは間接に理解していますが、最高人格者は自らの外的・内的両方の姿や形を知りつくしています。

Janmādy asya (ジャンマーディ アッシャ) (『シュリーマド・バーガヴァタム』 第1編・第1章・第1節) は、すべての創造・維持・破壊の根源は至高の意識を持つ人物である、という意味です。私たちの体験に照らしても、生命のない物体からは何も生みだされないこ

とは明白ですが、逆に生命のない物体は生命体から作りだされます。たとえば、物質の肉体は生命体と接触してこそ「動く機械」のように成長していきます。十分な知識を持っていない人は、肉体という機械を生命体そのものであると勘違いしますが、じつは、機械のように動く肉体の原動力は生命体です。命という火花が肉体から去ってしまえば、その体は使いものになりません。同じように、物質の力の根源は至高の人物です。この事実はあらゆるヴェーダ経典で表現され、精神的科学を提唱する人々がこぞって受けいれています。生命力をブラフマン (Brahman) といいます。偉大なアーチャーリヤ (教師) の一人であるシュリーパーダ・シャンカラチャーリヤは、ブラフマンを発生源、物質宇宙界を発生物と説きました。すべての力の根源は生命力ですから、「根本の生命力は至高の人物」という結論は理にかなっています。ですから、至高者は過去・現在・未来すべてを、さらには自ら創造した物質・精神両方の世界をも知りつくした方です。私たちは不完全な生物ですから、自分の体内でなにが起こっていることさえ知りませんし、食べ物を食べても、それがどのように栄養になり、その力がどのように自分の体を維持しているのかもわかりません。完璧な生命体は起こっていることすべてを把握していますし、またあらゆる面で完璧な方ですから、すべてを詳細に把握していると考えるのは自然な結論です。したがって『シュリーマド・バーガヴァタム』は、完璧な人物のことをヴァースデーヴァ (Vāsudeva)、すなわち「すべてを意識した状態でどこにでも遍在し、完全な力をすべて所有している人物」と呼んでいます。このような主題すべてが『シュリーマド・バーガヴァタム』で明白に説明されており、読者にはそれらを詳細かつ合理的に学ぶことができる豊富な機会が用意されています。

現代では、シュリー・チャイタンニヤ・マハープラブ (Śrī Caitanya Mahāprabhu) が模範をしめしながら『シュリーマド・バーガヴァタム』を人々に説きました。シュリー・チャイタンニヤのいわれなき慈悲という媒体をとおして、読者はこの偉大な書物のなかに容易に入っていくことができるのです。この点をふまえ、読者が『シュリーマド・バーガヴァタム』の真義を理解できるよう、主チャイタンニヤの生涯と教えのあらましを紹介します。

『シュリーマド・バーガヴァタム』は、必ず人物のバーガヴァタムから学ばなくてはなりません。人物のバーガヴァタムとは、『シュリーマド・バーガヴァタム』を実践しながら生きている人を指します。シュリー・チャイタンニヤ・マハープラブは絶対人格主神その方ですから、人物のバガヴァーン、音としてのバーガヴァタムです。ですから、主の『シュリーマド・バーガヴァタム』への接し方は、世界のだれもが実践できる方法です。『シュリーマド・バーガヴァタム』が、インドに生まれた人々によって世界の隅々にまで伝えられることは、主の望みでもありました。

『シュリーマド・バーガヴァタム』は、クリシュナ・絶対人格主神を学ぶための科学です。クリシュナについては、『バガヴァッド・ギーター』をひもとくことで理解することができます。シュリー・チャイタンニヤ・マハープラブは、だれであろうと、クリシュナ

の科学（『シュリーマド・バーガヴァタム』と『バガヴァッド・ギーター』）に精通していれば、典拠に支えられた説教徒に、そしてクリシュナの科学を説く教師になれる、と教えました。

世界中の苦しむ人々が幸福になれるように、クリシュナの科学が世に広められなくてはなりません。だからこそ私たち献愛者はすべての国の読者に向かって、自分自身の幸せのために、社会の福利のために、世界中の人々の幸せのために、クリシュナの科学を学んでいただくよう心から願うものです。

概 説

『シュリーマド・バーガヴァタム』の伝道者・主チャイタンニヤの生涯と教え

神への愛を説いた偉大な使徒、そして主の聖なる御名を大勢で唱える方法を提唱した父、主シュリー・チャイタンニヤ・マハープラブは、ベンガル地方のナヴァドゥヴィーパにあるシュリーダーマ・マーヤープラに降誕しました。時はシャカーブダ暦の1407年（西暦1486年）2月、パールグニー・プールニマー（満月）の夜のことです。

父シュリー・ジャガンナータ・ミシュラはシレット出身の博学なブラーフマナで、学徒としてナヴァドゥヴィーパに来ました。当時はナヴァドゥヴィーパが教育と文化の中心地と考えられていたからです。シュリー・ジャガンナータ・ミシュラは、ナヴァドゥヴィーパで偉大な学者として知られていたシュリーラ・ニーラーンバラ・チャクラヴァルティーの娘、シュリーマティー・シャチデーヴィーと結婚したあと、ガンジス川沿いに居をかまえました。

二人のあいだに多くの娘が生まれましたが、ほとんどが幼くして亡くなり、生きのこった二人の息子、シュリー・ヴィシュヴァルーパーとヴィシュヴァンバラに両親の愛情が注がれました。10番目で末の子のヴィシュヴァンバラはのちにニマーイ・パンディタという名で知られるようになり、のちに放棄階級を受け入れたあと、主シュリー・チャイタンニヤ・マハープラブとなりました。

主シュリー・チャイタンニヤ・マハープラブは48年間にわたって崇高な活動をくりひろげ、シャカーブダ暦1455年、プリーにて他界しました。

最初の24年間、主はナヴァドゥヴィーパで学徒として、また世帯者として暮らしました。伴侶となった最初の妻シュリーマティー・ラクシュミープリヤーは、主が家を留守にしていたときに若くして亡くなりました。東ベンガルからもどった主に母は再婚を勧め、主はその申し出を受けいれます。女性の名前をシュリーマティー・ヴィシュヌプリヤー・デーヴィーといい、やがてかのじよは残りの生涯を主との惜別のうちに暮らすこととなります。主が24歳にしてサンニャシー（放棄）階級になったからであり、このときシュリーマティー・ヴィシュヌプリヤーは16歳になったばかりの少女でした。

サンニャーシーになったあと、母シュリーマティー・シャチデーヴィーのたつての願いで、ジャガンナータ・プリーを活動の拠点とし、24年間この地に定住しました。この時期の6年間、主は全インドを（特に南インドを中心に）旅し、『シュリーマド・バーガヴァタム』を説きながら行脚しました。

主チャイタンニャは『シュリーマド・バーガヴァタム』を教えただけではなく、『バガヴァッド・ギーター』の教えをだれでも実践できる方法で人々に伝えました。シュリー・クリシュナは『バガヴァッド・ギーター』で絶対人格主神として表現されていますが、超越的な教えを満載したこの偉大な書物の最後の教えは、「あらゆる宗教活動を捨て、シュリー・クリシュナだけを唯一の崇拝する主として受けいれよ」という言葉にあります。主は「そうすれば、どのような悪事の報いからでもわたしが守ろう、臆することはない」と献愛者たちに約束しました。

しかしざんねんなことに、主シュリー・クリシュナが命じ、説いた『バガヴァッド・ギーター』の教えは明白なのに、知性に欠ける人々は主を単なる歴史上の偉人と誤解し、根源の人格主神として受け入れることができません。十分な知識のないそのような人は、世にはびこっている無神論者に惑わされます。こうして、『バガヴァッド・ギーター』の教えは大学者にでさえ間違っ て解釈されたりします。主クリシュナが精神界に帰ったあと、博識な学者と言われる人たちによって無数の『バガヴァッド・ギーター』の解説書が作りだされましたが、利益を求めようとする下心で出版されたものばかりです。

主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブは主シュリー・クリシュナその方です。しかし現代では、主の偉大な献愛者として降誕されました。それは、世の人々に、さらには宗教者や哲学者に、すべての原因の原因である根源の主シュリー・クリシュナの崇高な立場について教えるためだったのです。その教えの真髄は、「ヴラジャの王（ナンダ・マハーラージャ）の子としてヴラジャブーミ（ヴリンダーヴァン）に降誕した主シュリー・クリシュナは最高人格主神であり、ゆえにだれでも崇拝できる方である」という点にあります。ヴリンダーヴァン・ダーマの存在は主と同じです。なぜなら、主が自らを現わした、場所、その名前、名声、姿は、絶対的な知識に照らして主となんら変わるところがないからです。ですから、ヴリンダーヴァン・ダーマという聖地は主と同じように崇敬の対象でもあります。主を崇拝するもっとも高尚な方法は、主への純粹無垢な愛情という形でヴラジャブーミの乙女たちがしめしており、主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブもその方法をもっとも優れた崇拝法として私たちに勧めています。主は『シュリーマド・バーガヴァタ・プラーナ』を、主クリシュナを理解するための非の打ちどころのない書物として捉え、人生の究極目標は、プレーマ (prema) の境地、すなわち神への愛情に到達することである、と教えました。

主チャイタンニャを崇める数多くの献愛者——シュリーラ・ヴリンダーヴァナ・ダース・タークラ、シュリー・ローチャナ・ダーサ・タークラ、シュリーラ・クリシュナダーサ・

カヴィラージャ・ゴースヴァーミー、シュリー・カヴィカルナプーラ、シュリー・プラボ
ーダーナンダ・サラスヴァティー、シュリー・ルーパ・ゴースヴァーミー、シュリー・サ
ナータナ・ゴースヴァーミー、シュリー・ラグナータ・バッタ・ゴースヴァーミー、シュ
リー・ジューヴァ・ゴースヴァーミー、シュリー・ゴーパーラ・バッタ・ゴースヴァーミー、
シュリー・ラグナータ・ダーサ・ゴースヴァーミー、そして 200 年前から現代までの献愛
者として、シュリー・ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティー、シュリー・バラデー
ヴァ・ヴィデャブーシャナ、シュリー・シャーマナンダ・ゴースヴァーミー、シュリ
ー・ナローッタマ・ダーサ・タークラ、シュリー・バクティヴィノーダ・タークラ、そし
て筆者の精神指導者であるシュリー・バクティシッダーンタ・サラスヴァティー・ターク
ラ——その他多くの偉大かつ高名な学者・献愛者が、主の生涯や教えについて膨大な書物
や資料文献を残しています。それらの文献はどれも、ヴェーダ、プラーナ、ウパニシャッ
ド、『ラーマヤナ』、『マハーバーラタ』、そして先代のアーチャーリヤたちが承認し
ている歴史や文献にもとづいており、独特の構成、比類のない表現、そして超越的な知識
で満たされています。残念なことに、その存在は世界の人々にまだよく知られていません。
サンスクリット語とベンガル語で書かれたこれらの文献が各国の言語で出版され、そして
思慮深い人々の耳目を集めれば、師弟継承上のアーチャーリヤの見解に反する机上の空論
で平和と繁栄を求めている病的な現代社会に、インドの栄光と献愛奉仕のメッセージが洪
水のように世界を包むことでしょう。

主チャイタンニヤの生涯と教えを紹介するこの概説を読む読者は、さらにシュリーラ・
ヴリンダーヴァナ・ダーサ・タークラの『シュリー・チャイタンニヤ・バーガヴァタ』と、
シュリーラ・クリシュナダーサ・カヴィラージャ・ゴースヴァーミーの『チャタンニヤ・
チャリタームリタ』へと読みすすみ、はかりしれない恩恵を授かることでしょう。『チャ
イタンニヤ・バーガヴァタ』には主の幼少期の描写があり、その崇高な娯楽は読者を感動
の世界に誘います。主の教えについては、『チャタンニヤ・チャリタームリタ』に生き生
きと述べられており、今では、英語圏の人々は『主チャイタンニヤの教え』を英文で読む
ことができます。

シュリー・チャイタンニヤ・マハープラブの青年期については、同時代に生きていた側
近の献愛者たちの一人で、医者で献愛者のシュリーラ・ムラーリ・グプタが記録していま
す。また晩期については、主とともにプリーで暮らしていたシュリー・ダーモダラ・ゴ
ースヴァーミー（シュリーラ・スヴァールーパ・ダーモダラ）という主の秘書によって記
録されています。この二人の献愛者は主の行動をほとんど記録しており、主について述べ
ている上述の書物はどれもカダチャー（筆記帳）という形で記載されていました。

さて、主が降誕したのはシャカーブダ暦の 1407 年、パールグニー・プールニマーの夕刻
です。その日は、主の計らいで夕方に月食が起きました。ヒンドゥー教の人々は食（し
ょく）が起こると、身を清めるためにガンジス川や他の神聖な川で沐浴したり、ヴェーダ

のマントラを唱えたりする習わしがあります。こうして、主チャイタンニャが月食とともに誕生したとき、インド全土に神聖な音——ハレー クリシュナ、ハレー クリシュナ、クリシュナ クリシュナ、ハレー ハレー／ハレー ラーマ、ハレー ラーマ、ラーマ ラーマ、ハレー ハレー——がひびきわたりました。主のこれらの 16 の名前は多くのプラーナやウパニシャッドで述べられており、この時代のための *tāraka-brahma nāma* (ターラカ・ブラフマ ナーマ) とされています。シャーストラ (啓示経典) では、墮落した魂が主の神聖な名前を作法どおりに唱えれば、物質的な束縛から解き放されると勧められています。インドや他の国々には数多くの主の名前があり、どれも主が最高人格主神であることをしめしているため、そのすべてが素晴らしい特質をそなえていることに疑いの余地はありません。それでも、この 16 の名前は特に現代のために勧められており、私たちはこのハレー・クリシュナ・マントラを唱えてその恩恵をさずかり、シャーストラの規則を修練して大成した偉大なアーチャーリャの足跡に従うべきです。

主の降誕と月食が同時に発生したことは、主の独特な使命を物語っています。その使命とは、カリ (争い) の現代において主の崇高な名前を唱える重要性を伝道することにあります。現代ではささいなことでも争いの原因になるため、シャーストラは万民共通の悟りの境地を現代人に用意しています。それが主の聖なる名前の唱名です。人々が集い、自分たちの言葉で、心地よい音楽に乗せて主を讃え、そしてそれが正しい作法でおこなわれていけば、厳格な方法に従わなくても参加者は精神的な完成を達成できます。そのような集まりに参加すれば、賢くても愚かでも、金持ちでも貧しくても、ヒन्दウー教でもイスラム教でも、イギリス人でもインド人でも、チャンダーラでもブラーフマナでも、どんな人でもいっしょに超越的な音響を聴くことができ、物質とのかかわりのために心の鏡に積もった埃をぬぐいさることが出来ます。その使命は、世界中の人々が主の聖なる名前を全人類共通の宗教原則として受け入れることで確認されるでしょう。言い換えれば、聖なる名前の降臨は、主シュリー・チャイタンニャ・マハーブラブの誕生と時を同じくして起こったということです。

幼いころ、主が母親の膝の上で泣いているとき、女性たちがまわりで手拍子を取りながら聖なる名前を唱えると、主はすぐに泣きやみました。近所の住民たちはこの不思議な様子を畏敬のまなざしで見つめたものです。時には少女たちが主をわざと泣かせ、それから聖なる名前を唱えて泣きやませる——そんな遊びをしながら主の様子を見ておもしろがったりしていました。主はこうして幼いころから聖なる名前の大切さを説いていたのです。主は若いころニマーイ (Nimāi) という名前でも知られていましたが、これは、父方の家の庭にはえていたニームの木の下で誕生したことから、最愛の母がこの名前をつけたものです。

6ヶ月になった主に固形食を与えるアンナ・プラーシャナ (*anna-prāśana*) 儀式のとき、主の将来の生きざまをしめす出来事がありました。当時は、硬貨と本を子どもの目のまゝに置き、その子が将来どのような生き方を選ぶかを調べる慣習があり、主のまゝに硬貨と

『シュリーマド・バーガヴァタム』が並べられました。主は硬貨ではなく、『シュリーマド・バーガヴァタム』を選んだのです。

ある日、はいはいしていた幼い主のまえにへびが現われましたが、主はそのへびと遊びはじめました。家にいた人たちはみな恐怖で立ちつくしていましたが、やがてへびはどこかへ行き、主は母親に抱きかかえられました。また、主は体につけていた装身具を盗もうとやってきた泥棒に誘拐されたことがあります。泥棒はだれにも見つからないところで宝石を盗もうと焦っていたのですが、主はその肩に乗ってはしゃいでいます。ほうぼう歩きまわったあげく、泥棒はもといたジャガンナータ・ミシュラの家のまえにもどってしまい、つかまるのを恐れて赤ん坊を置いて逃げていきました。主の姿が見えなくなって心配していた両親や親戚たちは、戻ってきた主を見て一同ほっと胸をおろしたものです。

こんなこともありました。巡礼していたブラーフマナがジャガンナータ・ミシュラの家に泊まることになりました。ブラーフマナが自分の神像に食べ物を捧げようとする、主がそこに現われ、用意した食べ物を食べてしまいました。子どもがさわったのでブラーフマナはその料理を捨て、別の料理を用意しました。しかしまたしても主はその食べ物を食べてしまいます。3度同じことがあったあと、主は寝かされました。真夜中、家族たちが寝静まって各部屋が閉じられたあと、ブラーフマナは神像に特別な料理を用意しました。捧げようとしたそのとき、幼い主がどこからともなく現われ、食べ物を食べてしまいました。ブラーフマナは泣きだしましたが、全員が熟睡しているのでだれも起きてきません。このとき主は、幸運なこのブラーフマナのまえにクリシュナの姿で現われ、これら一連のできごとについて口外することを禁じ、母親の寝床にもどっていきました。

幼いころ、同じようなできごとが何度も起こっています。わんぱくだった主は、ガンジス川で沐浴していた伝統主義のブラーフマナたちをからかうことがありました。ブラーフマナたちは、「あなたのお子さんは学校にも行かずに我々に水をかけた」と父親に苦情を言いにきましたが、とつぜん主は制服の姿で教科書を片手に、たった今学校から帰ってきたかのように父親のまえに現われました。また近所の少女たちが、立派な男性と結婚できるようガータ（沐浴場）でシヴァの礼拝儀式をしているところを、よくからかったりしたものです。ヒन्दウー教の家庭の未婚女性たちはよくこの崇拜をしていました。少女たちが儀式をしていると、主はからかい半分で近寄り、「みんな。主シヴァに用意してきたその捧げもの、ぜんぶ僕に捧げたほうがいいよ。シヴァはぼくの献愛者だし、パールヴァティーもぼくの召使いなのさ。ぼくを崇拜してくれば、主シヴァも半神たちもずっと喜んでくれるはずだよ」と言うのです。いうことをきかない少女がいると、主は「前の妻たちとのあいだに7人の子がいるおじいさんと結婚するはめになる」とおどします。それを聞いて怖くなり、また主を愛する思いから、少女たちは主にいろいろな品物を捧げ、受け取った主はかのじよたちを祝福し、「立派で若い男性を夫に迎え、たくさんの子どもに恵ま

れた母親になれる」と言って安心させました。祝福されて心をときめかせる少女もいましたが、なかには自分たちの母親に主の悪さを言いつけたりする少女もいました。

こうして主は少年時代を過ごしました。16歳になると自分のチャトウシュパーティー (*catuspāṭhi*) (博学なブラーフマナが指南する村の塾) を始めました。この塾で主は、ただクリシュナのことだけを——文法を読み取るときにでさえ——説明しました。シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーは、主の満足のためにサンスクリット語の文法書を編纂していますが、そのなかで、主の聖なる名前を使った例文で文法を説明しています。この文法は現在でも使われています。ハリ・ナーマームリタ・ヴァーカルナと呼ばれており、ベンガル地方の学校の講義内容に指定されています。

この時期、カシミールの大学者として知られていたケーシャヴァ・カーシュミーリーというパンディタ (学者) が、シャーストラについて論戦するためにナヴァドゥヴィーパを訪ねてきました。このパンディタはインドの学問の地を巡り歩き、全国を制覇していた学者でした。最後に辿りついたのがナヴァドゥヴィーパで、ここにいる博識なパンディタたちに挑戦するつもりでした。ナヴァドゥヴィーパのパンディタたちは、ニマーイ・パンディタ (主チャイタンニャ) をカシミールのパンディタと対決させることにしました。ニマーイ・パンディタが降参しても、しょせん少年にすぎないのだから、かれらの誰かがもう一度挑むチャンスがある、と考えたからです。いっぽうで、カシミールのパンディタが負けるようなことがあれば、人々は「ナヴァドゥヴィーパに住む少年がインド一の名高い最高位の学者を打ち負かした」と言い広めるでしょうから、かれらの評判はさらに高まります。ニマーイ・パンディタは、ガンジス川の岸辺を歩いていたときにケーシャヴァ・カーシュミーリー出会いました。主はパンディタに、ガンジス川を称讃するサンスクリット語の節を詠むよう求めました。すぐさまパンディタは 100 のシュローカ (詩節) をまとめあげ、矢継ぎ早に吟唱し、並はずれた学識を見せつけました。対するニマーイ・パンディタは聞いたばかりの節を一つ残らず暗記し、そして 64 番目の節の修辞構造と文法の不一致を指摘しました。それは、パンディタが使った *bhavānī-bhartuḥ* (バハヴァーニー・バルトウフ) という語句です。主は「バヴァーニー (*bhavānī*) は『シヴァの妻』という意味ですから、その表現では『シヴァの妻の夫 (バルター・*bhartā*)』となり、意味が重複しています。シヴァのほかに『夫』がいるとでもおっしゃるのですか」と指摘したのです。主はほかにもいくつもの矛盾点を突き、カシミールのパンディタは哑然とするばかり。文法を学んでいる生徒にすぎない少年が、多才な学者の文章の間違いを指摘できることに仰天しました。二人のやりとりは公の会議以前におこなわれたことでしたが、そのいきさつはナヴァドゥヴィーパ全土に山火事のようにまたたくまに広がっていきました。しかし最後には、学問の女神・サラスヴァティーがケーシャヴァ・カーシュミーリーの夢に現われ、降参するよう命じ、こうしてカシミールの学者は主の従者になったのでした。

その後、主は絢爛豪華な結婚式を挙げて妻をめとり、以来、ナヴァドゥヴィーパで主の聖なる名前を集まって唱える布教方法を始めます。ブラーフマナのなかには主の評判を妬む者がいて、何度も妨害しようとしてきました。嫉妬心を抑えきれない者たちは、やがてナヴァドゥヴィーパのイスラム教の裁判官に訴訟を起こしました。当時ベンガル地方はパタン人が統治していましたが、この地域の知事はナワブ・フセイン・シャハでした。同じイスラム教であった治安判事（カジ）はブラーフマナたちの苦情をゆゆしい問題として受けとめ、最初はニマーイ・パンディタの従者にハリの名前を大声で唱えてはならない、と警告しました。しかし主チャイタンニヤはカジの通達を無視するよう指示し、従者たちはいつものようにサンキールタン（唱名）に繰りだしました。それに対抗した判事は警官を出動させ、警官たちはサンキールタンを妨害し、ムリダンガ（太鼓）をこわしたりしました。この騒動について知らせを受けたニマーイ・パンディタは市民的不服従を起こします。主チャイタンニヤは、インドにおける正当な理由にもとづいた市民抵抗運動の先駆者でもあります。数千個のムリダンガやカラターラ（ハンドシンバル・銅拍子）を演奏する10万人の人々が、通達を出したカジに逆らってナヴァドゥヴィーパの道路を行進しました。やがて群衆はカジの邸宅に到着しましたが、カジは恐怖を感じて二階に身を潜めていました。集まった人々の怒りは頂点に達していましたが、主は冷静になるよう呼びかけました。このときカジは階下に下り、主を自分の甥（おい）と呼びかけて主の気持ちをなだめようとしてきました。カジは、「ニーラーンバラ・チャクラヴァルティーは私のことを叔父（おじ）と呼んでおり、だからあなたの母親シュリーマティー・シャチデーヴィーは、私にとって妹にあたる」と言います。そして主に向かって、「自分の妹の子が叔父の家で怒ったりするのは異常なことだ」と正しました。それに対して主は、「あなたはわたしの母方の叔父にあたる方だから、叔父は甥を丁重に迎えるべきではないでしょうか」と答えました。こうして、はりつめていた空気がやわらぎ、二人の博学な学者によるコーランとヒンドゥー教のシャーストラにもとづく長い対話が始まりました。主はまず牛の屠殺をとりあげ、カジはコーランを引用して的確に答えました。次に、カジがヴェーダが述べる牛の供儀祭について問いただし、主はそれは牛を殺すための儀式ではない、と説明します。儀式で捧げられる年老いた牡牛や牝牛は、ヴェーダのマントラの力によって新鮮で若返った命を授かります。いっぽう、カリ・ユガでは供儀祭を執行する力量を持つブラーフマナがいないため、そのような儀式は禁じられています。事実、カリ・ユガではどのようなヤギヤ（儀式）も禁じられています。愚かな人たちによる無益な行為にすぎないからです。カリ・ユガでは、すべての目的をかなえる実践的なサンキールタン・ヤギヤだけが勧められています。こうして、主の説明にすべて納得したカジは主の従者になりました。カジはその後、なんびとたりとも主が始めたサンキールタン運動を妨害してはならないと宣言し、この命令を子孫に向けた遺言として残しました。カジの墓は今でもナヴァドゥヴィーパにあり、ヒンドゥー教の巡礼者はそこを訪れて敬意を表しています。墓の周辺住民はカジの子孫ですが、決

してサンキールタン運動に反対することはなく、ヒンドゥー教とイスラム教が対立していた時代にでさえ、サンキールタンを妨害することは決してありませんでした。

このできごとは、主が臆病なヴァイシュナヴァではないことを物語っています。ヴァイシュナヴァは主の勇敢な献愛者であり、正義のためなら目的にかなったいかなる手段でも遂行します。アルジュナも主クリシュナのヴァイシュナヴァ・献愛者で、主を満足させるために勇猛果敢に戦いました。そしてヴァジラーンガジの異名をもつハヌマーンも主ラーマの献愛者で、ラーヴァナの無神論一族を徹底的に懲らしめました。あらゆる手段をこらして主を満足させることがヴァイシュナヴァの基本原則です。ヴァイシュナヴァは本来暴力に訴えることなく、心穏やかに生き、神の優れた性質をすべてそなえています。不信心な者たちが主や主の献愛者を冒瀆するとき、そのような愚行に目をつぶることは決してありません。

このできごとのあと、主はバーガヴァタ・ダルマ、すなわちサンキールタン運動をさらに精力的に説くようになり、ユガ・ダルマ（現代の義務）を世に広める活動を妨げようとする者たちは、さまざまな報いを受けて相応に罰せられました。主の母方の叔父のチャーパラとゴーパーラという二人のブラーフマナはハンセン病になって苦しみましたが、自らの行為を悔やんで謝罪し、主に許されました。主は布教活動のために毎日従者を送りだしていましたが、そのなかにシュリーラ・ニチャーナンダ・プラブ、タークラ・ハリダースという陣頭を指揮する献愛者がいます。かれらは各家庭を訪ねて『シュリーマド・バーガヴァタム』について説きました。ナヴァドゥヴィーパは主のサンキールタン運動で活気あふれ、主の活動の拠点がシュリーヴァーサ・タークラとシュリー・アドヴァイタ・プラブという二人の世帯者の従者の家になっていました。ブラーフマナの家庭に誕生したこの二人の博学な献愛者は、主チャイタンニヤの最大の熱烈な支援者です。シュリー・アドヴァイタ・プラブこそが、主の降誕の直接の原因となった人物です。社会が物中心で動き、物質存在の三重苦から人類を救う唯一の方法である献愛奉仕が失われている有様を見て、そしてカリ時代に影響されて苦しむ人々に対する哀れみの心から、主の化身の降誕を切実に祈り、ガンジス川の水と神聖なトゥラシーの葉を捧げながら主を崇拜しました。サンキールタン運動での各献愛者の布教活動については、だれもが主の指示を受けながら日々の役割をはたすよう決められていました。

ある日のことです。ニチャーナンダ・プラブとシュリーラ・ハリダース・タークラが大通りを歩いていると、黒山の人だかりができていました。近くにいた人に聞くと、ジャガーイとマーダーイという兄弟が酔って騒ぎを起こしているとのこと。また、二人が立派なブラーフマナの家庭に生まれたこと、卑俗なつきあいのために極悪非道の人間に変わりをはたしたこともわかりました。酒におぼれ、肉を食らい、女性を追いかけ、盗みをはたらき、そして悪行のかぎりをつくす罪人になっていたのです。シュリーラ・ニチャーナンダ・プラブはこの話を聞き、墮落したこの二人こそ最初に救わなくては、と決意しました。二人

が罪な生活から救われれば、主チャイタンニャのすばらしい名前がさらに讃えられるはず
です。こう考えたニチャーナンダ・プラブとハリダース・タークラは人ごみを押しわけて
二人に近づき、主ハリの聖なる名前を唱えるよう誘いました。酔っていた兄弟はその言葉
を聞いて逆上し、ニチャーナンダ・プラブを汚い言葉でののしりました。そして二人を執
拗に追いかけてきました。夕方、その布教の様子を聞いた主は、愚かな兄弟を救おうとし
た二人の試みをたいそう喜びました。

翌日、ニチャーナンダ・プラブはふたたび兄弟に会いにいきます。しかし話しかけよう
としたとき、一人がニチャーナンダ・プラブに土器のかけらを投げつけました。それが額
に当たり、血が流れだしました。それでも心やさしいニチャーナンダ・プラブは、その蛮
行に対抗するどころか、こう言うのです。「あなたが石を投げつけようと、わたしはなん
とも思わない。それでも、聖なる主ハリの名前を唱えてほしい。それがわたしの願いです」

兄弟の一人ジャガーイは主ニチャーナンダ・プラブがとった態度におどろき、すぐに主
の足元にひれ伏し、ジャガーイの非道を許してくれるよう乞いました。マーダーイがふた
たびニチャーナンダ・プラブに殴りかかろうとするところをジャガーイが止め、主にひれ
伏すよう説得しました。やがてニチャーナンダ・プラブが負傷した知らせは主チャイタン
ニャに届き、主は憤怒の形相凄まじく、すぐさま現場にかけつけました。到着した主は瞬
時にスダルシャナ・チャクラ（主の究極の車輪状の武器）を取りだし、二人の極悪人を殺
そうとしました。しかしニチャーナンダ・プラブは、ご自分の使命を思いだしてください、
どうか助けてやってください、と哀願しました。主の使命とは、救いの手もなくカリ・ユ
ガに生きる墮落した魂を救うことであり、このジャガーイとマーダーイこそ、墮落した魂
の象徴だったのです。現代人は、良家に生まれようと世間体が良かろうと、90%はこの兄
弟と大差ありません。啓示經典の言葉を借りれば、現代の世界中の人間は最下等のシュー
ドラ、いやそれ以下の人間です。ここで特筆しておくべきことは、シュリー・チャイタン
ニャ・マハープラブは、人を家系で決めつける形式的なカースト制度は認めなかったとい
うことです。主は人の本来の姿・スヴァルーパ (svarūpa) をシャーストラの見解にもとづ
いて判断していました。

主が今まさにスダルシャナ・チャクラを放とうとし、シュリーラ・ニチャーナンダ・プ
ラブが兄弟を許すよう乞うていたとき、兄弟は主の蓮華の御足にひれ伏し、非礼を許して
くれるよう哀願しました。ニチャーナンダ・プラブからも、悔い改めたこの魂たちを許し
て受け入れるよう求められた主は、今後あらゆる悪事や道楽からきっぱり手を切るという
条件を差しだし、二人は悪癖を捨てることを約束しました。その約束を聞いた心やさしい
主はすべてを許し、二人の過去の過ちを責めることは二度とありませんでした。

これこそが主チャイタンニャのたぐいまれな優しさです。現代では、罪を犯していない
と言いきれる人はだれもいません——だれであろうと。しかし主チャイタンニャはどんな

罪人でも受けいれます。正しい精神指導者から正式な入門式を授かったあとはけっして悪癖に耽ったりしない、と約束しさえすれば。

この二人の兄弟のできごとから、価値ある教えを数多く見いだすことができます。今のカリ・ユガで、すべての人々は事実上ジャガーイとマーダーイと同じです。過去の罪の報いから逃れるには、主チャイタンニャ・マハープラブに身をゆだね、シャーストラが禁じる罪なおこないを捨てなくてはなりません。具体的な禁止事項については、主がシュリーラ・ルーパ・ゴースヴァーミーに語った教えのなかに含まれています。

主は、世帯者として暮らしていた時期、偉人が見せるような奇跡はほとんど起こしていませんが、1度だけ、シュリーニヴァーサ・タークラの家でサンキールタンが最高潮に達していたとき、すばらしい奇跡を起こしています。献愛者たちに食べたいものを尋ねると、かれらはマンゴーを望みました。マンゴーはその季節ではありませんでしたが、主は種を持ってくるよう言いました。種が届くと、主は庭に植えました。植えたたん、芽が伸びだしてまたたくまに大きな木に成長し、献愛者たちが食べきれないほどの熟したマンゴーの実がたわわに実りはじめたのです。木は同じ場所で生きつづけ、献愛者たちはいつでも好きなだけマンゴーを食べることができました。

主チャイタンニャは、ヴラジャブーミ（ヴリンダーヴァン）の乙女たちのクリシュナに対する愛情をこのうえなく尊んでいましたが、あるときその主への無垢な奉仕を讃えて、主の名前ではなくゴーピー（牛飼いの乙女）の聖なる名前を唱えたことがあります。そのとき主の弟子だった生徒たちが居あわせていましたが、主がゴーピーの名前を唱えているのを聞いて驚きました。未熟なかれらはなぜゴーピーの名前を唱えているのかと尋ね、そしてクリシュナの名前を唱えるよう促しました。法悦心に満たされていた主は愚かな生徒たちに心乱され、かれらを厳しく叱り、追いはらいました。主とほぼ同じ年代だったかれらは、主のことを仲間のように誤解していたのでした。そしてまた同じように罰せられるようなことがあれば、主に反撃することを決めました。このできごとがあつてから、主について悪意あるうわさが交わされるようになりました。

憂慮した主は、さまざまな社会階層の人々について考えました。そして特に生徒・教師・果報を求める者・ヨーギー・非献愛者・無神論者は、主への献愛奉仕に反対しがちであることに気づきました。「わたしの使命は、現代の墮落した魂たちを救うことにある。しかしそんなかれらが、わたしをありふれた人間と見なして冒瀆するようなことがあれば、恩恵を授かることはできない。かれらが精神的な悟りを得られる生活を始めるには、なんらかの形でわたしに敬意をしめさなくてはならない」。主はこう考えたあと、一般の人々がサンニャーシーを尊重する気持ちを持っていることから、放棄階級（サンニャーサ）を受け入れることにしました。

500年前の世相は今ほど墮落していませんでした。当時、人々はサンニャーシーを尊敬していましたし、サンニャーシーも放棄階級に定められている規則や原則に徹底して従って

いました。シュリー・チャイタンニャ・マハープラブはカリ・ユガの放棄階級にもろ手をあげて賛成していたわけではありません。現代のほとんどのサンニャーシーが放棄階級生活の規則や原則に従えないという現実を見れば、主が賛成しない理由はおのずと明らかです。シュリー・チャイタンニャ・マハープラブは、一般の人たちが敬意を表わせるように、放棄階級を受け入れて理想的なサンニャーシーになる決心をしたのです。サンニャーシーはすべてのヴァルナとアーシュラマの筆頭に立つ立場にいますから、私たちは義務としてサンニャーシーに敬意を示さなくてはなりません。

サンニャーサ階級になることを考えていたとき、ケーシャヴァ・バーラティーというマヤーヴァーダ流派でカトウワ（ベンガル地方）在住のサンニャーシーがたまたまナヴァドゥヴィーパを訪ねてきており、主との食事に招待されました。ケーシャヴァ・バーラティーが訪ねてきたとき、主はサンニャーサを授けてくれるよう頼みました。慣習上その必要があったからです。サンニャーサ階級は別のサンニャーシーから授からなくてはなりません。主はあらゆる面で自立されている方ですが、シャーストラが定める儀礼に従うために、ヴァイシュナヴァ・サンプラダーヤ（流派）ではなかったケーシャヴァ・バーラティーからサンニャーサの称号を授かったのです。

ケーシャヴァ・バーラティーの助言に従い、主はサンニャーサ階級を正式に受けるためにナヴァドゥヴィーパからカトウワに向かいました。シュリーラ・ニテャーナンダ・プラブ、チャンドラシェーカラ・アーチャーリヤ、ムクンダ・ダッタが同行し、儀式の一部始終を補佐しました。主がサンニャーサになった様子については、シュリーラ・ヴリンダーヴァン・ダース・タークラが『チャイタンニャ・バーガヴァタ』の中で余すところなく描写しています。

こうして主は24歳最後のマーガ月にサンニャーサ階級となりました。サンニャーシーになったあとは、バーガヴァタ・ダルマの布教だけに没頭する生活に入ります。世帯者のときのように布教活動を続けていましたが、その布教の道で障害に直面したときには、墮落した魂のために自らの家庭の安らぎさえ犠牲にしました。主が世帯者のときに中心的な補佐役になっていたのはシュリーラ・アドゥヴァイタ・プラブとシュリーラ・シュリーヴァーサ・タークラでしたが、サンニャーシーになったあとは、ベンガル地方で特に布教活動をするよう任命されていたシュリーラ・ニテャーナンダ・プラブが、そして（今では巡礼地になっている）聖地を発掘するようヴリンダーヴァンに送られたシュリーラ・ルーパとサナータナを筆頭とする6人のゴースヴァーミー（ルーパ・ゴースヴァーミー、サナータナ・ゴースヴァーミー、ジーヴァ・ゴースヴァーミー、ゴーパーラ・バッタ・ゴースヴァーミー、ラグナータ・ダーサ・ゴースヴァーミー、ラグナータ・バッタ・ゴースヴァーミー）が中心的な補佐役になりました。現在のヴリンダーヴァンの町とヴラジャブーミの重要性は、こうして主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブの望みによって世に知られるようになったのです。

サンニャーシーになってすぐにヴリンダーヴァンに向けて旅立ちます。そして3日間、ラーダ・デーシャ（ガンジス川が流れていない一帯）を歩きました。これからヴリンダーヴァンに行けるのだ、という至福感に満たされて。ところが、シュリーラ・ニチャーナンダがわざとまちがった道を教え、シャーンティプラにあるアドウヴァイタ・プラブの家に行かせました。主はシュリー・アドウヴァイタ・プラブの家に数日とどまりましたが、主がこれから家庭を捨てようとしていることを知っていたシュリー・アドウヴァイタ・プラブはナヴァドゥヴィーパに使いを出して、母シャチャーを呼びました。我が子との最後の対面の機会を用意したのです。悪意のある者たちは、主チャイタンニャはサンニャーシーになってからも妻と会い、履いていた木のスリッパを崇拜用として渡したと言っていますが、信頼できる情報源によればそのようなことはありません。母はアドウヴァイタ・プラブの家で我が子と再会しましたが、サンニャーシーの衣服を着ていたことを嘆き悲しみました。母親の願いを聞いてほしかったシャチャーは、我が子の様子がわかりやすいようプリーに布教の拠点を置くよう頼みました。主は愛する母の最後の願いを聞きいれました。このあと、主はプリーに向けて旅立ちます。主と別れて深い悲しみに沈むナヴァドゥヴィーパの住民たちを残して。

主はプリーへの道すがら、重要な場所を数多く訪れています。その1つがゴーピーナータジー寺院です。主ゴーピーナータジーは自分の献愛者であるシュリーラ・マーダヴェェンドラ・プリーのためにコンデンスミルクを盗みました。以来、ゴーピーナータジー神像は、クシーラ・チョーラー・ゴーピーナータという名前でもよく知られるようになりました。主チャイタンニャはこの話をたいそう喜んで聞きました。盗むという傾向は絶対者のなかにもありますが、それを絶対者が自ら表現したため、反道徳的な意味合いはなくなり、主チャイタンニャさえ「主と、そして主の盗む気質は同じである」という絶対的な見解にもとづいて主の行為を讃えました。ゴーピーナータジーにまつわるこの興味深い話は、クリシュナダーサ・カヴィラージャ・ゴースヴァーミーが『チャタンニャ・チャリタームリタ』の中で鮮やかに描写しています。

主はオリッサ州のレームナーにあるこのクシーラ・チョーラー・ゴーピーナータの寺院をあとに、プリーへ向かいました。途中、サークシ・ゴーパーラ寺院も訪れます。このサークシ・ゴーパーラ神像は、ブラーフマナで献愛者だった二人の家族間で起こったもめごとを決着させるために目撃者となって現われました。主チャイタンニャはこのサークシ・ゴーパーラにまつわる話をひじょうに喜んで聞きました。それは、偉大なアーチャーリヤたちによって認められ、そして寺院で崇拜されている神像は、十分な知識のない者が主張しているような「偶像」ではない、ということが無神論者たちに訴えたかったからです。寺院の神像は人格主神のアルチャー (arcā) 化身であり、すべてにおいて主そのものです。主は、献愛者が主に寄せる愛情に見合った対応をしてくれます。サークシ・ゴーパーラの話では、二人の献愛者が家族間の誤解に巻きこまれ、主は召使いへの特別な親近感をしめ

しながらその騒動を収拾するために、ヴリンダーヴァンからオリッサ州のヴィデャーヴァナという町まで、アルチャー神像のまま歩きました。その後神像はカタック（オリッサ州）に移され、それ以来サークシ・ゴーパーラの寺院は、今でもジャガンナータ・プリーに向かう多くの巡礼者が立ちよる場所になっています。主チャイタンニャはこの寺院で1泊し、翌日プリーに向けて出発しました。途中、主のサンニャーシーの棒をニチャーナンダ・プラブが折ってしまいます。主はニチャーナンダ・プラブの行為に見かけでは怒った表情を見せ、いっしょに歩いてきた献愛者たちをその場に残し、一人でプリーに向かったのです。

プリーに到着した主はジャガンナータの寺院に入りました。主はたちまち超越的な至福感に包まれ、気を失って寺院の床に倒れました。寺院の番人たちには主の超越的な行動が理解できませんでしたが、その場に居合わせたサールヴァバウマ・バッターチャーリャという博学な大学者は、主がジャガンナータ寺院に入って気を失ったことの特異性を見抜いていました。サールヴァバウマ・バッターチャーリャは、オリッサ州の王であるマハーラージャ・プラターパルドウラから宮廷の筆頭のパンディタとして任命されていた人物です。シュリー・チャイタンニャ・マハープラブの若々しい輝きに魅了され、このような超越的な法悦境は、物質的存在を忘れた崇高な状態にいる最高位の献愛者だけが見せる稀な兆候であることを知っていました。解放された魂だけがそのような超越的徴候を見せるのであり、広い見識を持つバッターチャーリャは、精通していた超越的文献に照らし合わせることで目のまえで起こったことが理解できたのです。そこで、この見知らぬサンニャーシーのことで騒がないよう寺院の守衛たちに話し、意識を失っている主の状態をもっと詳しく調べるために、自宅に運ぶよう命じました。当時サールヴァバウマ・バッターチャーリャはサンスクリット語文学における政府の首席学者・*sabhā-panḍita*（サバー・パンディタ）という最高権威者であったことから、主はただちにその家に運ばれました。この教養ある学者は主チャイタンニャが見せている超越的な兆しをくわしく調べたいと考えました。というのは、なにも知らない大衆の目を欺いて利用しようとする下心で、悟った人間の行動をまねる不心得者がいたからです。バッターチャーリャのような博識な学者はそういう輩を看破し、見つけしだいかれらの欺瞞を暴くことができます。

バッターチャーリャは、シャーストラの記述に照らして主チャイタンニャ・マハープラブの症状をすべて調べました。愚かな感傷家としてではなく、科学者として調査したのです。腹部の動き、心臓の鼓動、鼻からの呼吸を観察し、さらに主の脈拍も調べ、主の身体の機能がまったく停止していることも判明しました。小さな綿の切れ端を主の鼻先に近づけると、綿がかすかに動くことから、主がわずかに呼吸をしていることがわかります。このような診断から、主の忘我の境地は本物であることを確信し、処方箋どおりに対応しようと思いました。しかし、主チャイタンニャ・マハープラブの意識をもどすには一つの特別な方法しかありません。献愛者が唱える聖なる名前だけに反応するのです。この特別な方

法をサルヴァバウマ・バターチャーリャは知りませんでした。かれにはまだ主の正体がわからず、寺院で主を初めて見たときも、主が一般の巡礼者にしか見えなかったのですから。

いっぽう寺院では、主に付きそってきた献愛者たちが遅れて到着し、主が超越的な徴候を見せてバターチャーリャの家へ運ばれたことを聞きました。このできごとはまだ寺院にいた巡礼者たちのあいだでもちきりになっていました。しかし偶然にも、巡礼者のなかの一人がガダーダラ・パンディタの知り合いのゴーピーナータ・アーチャーリャに会い、主がサルヴァバウマ・バターチャーリャの住居で意識を失って横たわっていることを聞きました。ゴーピーナータ・アーチャーリャはサルヴァバウマ・バターチャーリャの義理の兄弟でした。ガダーダラ・パンディタから一行を紹介されたゴーピーナータ・アーチャーリャは、バターチャーリャの家で崇高な意識のなかで横たわっていた主のもとにかれらを案内しました。主のもとに集まった献愛者たちはいつものように聖なる主ハリの名前を唱え、主はそこで意識をとりもどしました。このあとバターチャーリャは主ニチャーナンダ・プラブを含む全員を迎え、来賓として滞在してくれるよう申しでました。主と一行は海岸へ沐浴に行き、バターチャーリャはかれらの宿泊場所を用意し、カーシー・ミシュラの邸宅での食事に招きました。義理の兄弟であるゴーピーナータ・アーチャーリャも接待の準備に加わりました。二人は主の神性について気さくに話しあい、以前から主をよく知っていたゴーピーナータ・アーチャーリャは主を人格主神として立証しようとし、いっぽうバターチャーリャは主を偉大な献愛者として立証しようとしました。二人の論点は権威あるシャストラにあり、感情だけの世論の力に頼ったものではありません。神の化身は愚かな狂信者の投票の数で決まるのではなく、シャストラという正しい典拠に従って決定されるものです。主チャイタンニャはまぎれもない神の化身であったため、浅はかな狂信者たちは正しい経典を無視して、現代には多くの神の化身がいる、と言いふらしています。しかしサルヴァバウマ・バターチャーリャもゴーピーナータ・アーチャーリャも、そのような愚かな感傷主義者ではなく、威信あるシャストラの力だけを根拠にして主の神性について立証し、また拒絶しました。

のちになって、バターチャーリャもナヴァドゥヴィーパ地方の出身であること、またかれの話から、主チャイタンニャの母方の祖父ニールンバラ・チャクラヴァルティーが、サルヴァバウマ・バターチャーリャの父親の級友だったことがわかりました。そのことを知り、また若いサンニャシーだった主チャイタンニャは、バターチャーリャに対して父に対するような情愛を感じるようになりました。バターチャーリャはシャンカラチャーリャ・サンプラダーヤ流派にいる多くのサンニャシーの教師であり、自身もその流派に属しています。そのため、若いサンニャシーの主チャイタンニャにもヴェーダーンタ哲学の教えを聞いてほしいと望んでいたのです。

シャンカラ流派の従者はヴェーダーンティストとよく呼ばれます。しかし、だからといってヴェーダーンタがシャンカラチャーリヤ・サンプラダーヤの独占学問だというわけではありません。ヴェーダーンタは真正なすべてのサンプラダーヤでも学ばれていますが、各流派で異なる解釈がなされています。しかし、シャンカラ・サンプラダーヤに属する人々は、ヴァイシュナヴァのヴェーダーンティストが説く知識を知らないのが一般的です。この理由から、筆者にバクティヴェーダンタという称号が初めて授与されました。

主はバターチャーリヤからヴェーダーンタ哲学を学ぶことに同意し、ジャガンナータ寺院で対座しました。バターチャーリヤは7日間続けて説明し、主は傾聴し、話の腰を折ることはしませんでした。主が一言も発しないことをバターチャーリヤはいぶかしく思い、自分のヴェーダーンタの説明に対してなぜ質問も意見もしないかと尋ねました。

主はバターチャーリヤのまえでは無学な弟子としてふるまい、また「私からヴェーダーンタの講義を受けるのはサンニャシーの義務である」とバターチャーリヤが思っているから、傾聴していました。しかし、その講義の内容について納得していたわけではありません。主が自分の行為をとおしてしめしているのは、シャンカラ・サンプラダーヤ、あるいはシュリーラ・ヴァーサデーヴァの教えに従っていない他のサンプラダーヤのヴェーダーンティストは、ただ機械的にヴェーダーンタを学んでいるにすぎない、という事実です。かれらはその深遠な知識を十分に把握していないのです。『ヴェーダーンタ・スートラ』の解説は、著者自らが『シュリーマド・バーガヴァタム』の節で用意しています。『シュリーマド・バーガヴァタム』についてなにも知らない人は、ヴェーダーンタのなんたるかをほとんど知りません。

バターチャーリヤは広範囲な学識をそなえた人物でしたから、名高いヴェーダーンティストに向けられた遠まわしの主の言葉が理解できました。そこで、理解できなかった箇所について問いたださなかった理由を尋ねました。傾聴しつつ黙りこくっている主の意図を、かれは知っていました。内心別のことを考えているにちがいない、と察したのです。だからバターチャーリヤは、わけを聞かせてくれるよう主に求めました。

そこで主が説明を始めます。「師よ。わたしは *janmādy asya yataḥ* (ジャンマーディ アッシャ ヤタハ) (『シュリーマド・バーガヴァタム』第1編・第1章・第1節)、*śāstra-yonitvāt* (シャーストゥラ・ヨーニトゥヴァートツ)、また『ヴェーダーンタ・スートラ』の *athāto brahma jijñāsā* (アタハートー ブラフマ ジギャーサー) のようなスートラの意味は理解しております。ところが、あなたさまの解釈がわたしには理解できません。スートラの意味はすでにそのなかに明言されていますが、そのご説明は、異なる意味でその真義を覆い隠しておられます。スートラの意味を意図的に違った意味にとらえ、ご自分の歪曲した解釈を加えておられます」。

主はこのように、『ヴェーダーンタ・スートラ』を当世風に解釈し、自分たちの目的を満たすために乏しい理解力にあわせて意味を曲解しているヴェーダーンティストを糾弾し

たのです。『ヴェーダーンタ・スートラ』のような由緒ある経典を曲解する行為は、ここで主によって非難されています。

主は言葉をつづけます。「シュリーラ・ヴァーサデーヴァはウパニシャッドのありのままの意味を『ヴェーダーンタ・スートラ』で要約しています。遺憾なことに、先生はその意味を受けいれておられません。別の意味に曲解されているのです。

だれであろうとヴェーダの権威に挑戦することはできませんし、ヴェーダは一切の疑問を超越しています。ヴェーダが述べることはなんでもすべて受けいれなくてはなりません。それができないのであればヴェーダの権威に挑戦している、ということになります。

ほら貝と牛糞は生物の骨と糞で出来ています。しかし、ヴェーダが純粋なものとして教えているからこそ、人々はヴェーダという権威に従ってありのままに受けいれます」。

大切な点は、人の不完全な理屈はヴェーダの権威を超えることはできない、ということです。ヴェーダの命令には、通俗な推論を持ちこまずにそのまま従わなくてはなりません。ヴェーダの教えに従っていると自いつつ自分の解釈を持ちだす従者がいて、ヴェーダの宗教と称してさまざまな団体や教派を作ったりします。主仏陀はヴェーダの権威を真っ向から否定し、自分流の宗教を確立しました。このため仏教はヴェーダの厳格な従者に容認されていません。ところが、表面はヴェーダの従者でも仏教徒よりも始末の悪い輩もいます。仏教徒はあからさまにヴェーダを拒否する勇気をもっていますが、自称のヴェーダの従者は、陰ではヴェーダの教えに背いているのに、拒否する勇気をもっていません。主チャイタンニャはこのような従者を非難しています。

主が挙げたほら貝と牛糞の例は、ヴェーダの権威に関する論点の核心を突いています。「牛糞は純粋なのだから博学なブラーフマナの糞も純粋である」という結論にはならないはずで、牛糞はそうだとすると、いくら高い地位にいるブラーフマナでもそれが当てはまるわけではありません。主が言葉をつづけます。

「ヴェーダの教えそのものに絶大な権威がこめられています。通俗な人間がヴェーダの教えを自分の都合に合わせるのは、その権威に挑んでいることになります。『自分はシュリーラ・ヴァーサデーヴァよりも賢い』と考えるのは愚かなことです。シュリーラ・ヴァーサデーヴァはすでにスートラをとおして教えをしめしていますから、その足元にも及ばない人間の助けなど必要ありません。自著『ヴェーダーンタ・スートラ』は真昼の太陽のように光り輝いています。『ヴェーダーンタ・スートラ』のような自ら輝く書物について自分勝手な解釈をくわえる行為は、自分の空想という雲のかたまりで太陽を覆い隠そうとしているも同然です。

ヴェーダとプラーナは目的において一つであり、他の一切をしのぐ絶対真理者について究明しています。絶対真理は、絶対的な支配力を持つ絶対人格主神として最終的に悟ることができます。ですから、絶対人格主神には完全なる富・力・名声・美しさ・知識・放棄

心が完璧にそなわっているはずですが。それでいて、崇高な人格主神は、驚くべきことに、人格を持っていない存在としても確証されています。

ヴェーダが説いている絶対真理者の非人物的な説明は、絶対全体者に関する俗な概念を打ち消すために用意されています。主の人としての姿は、まったく別次元の姿として捉えなくてはなりません。すべての生物も個々の人格を持っており、最高絶対者の部分です。その部分は個々の人物ですから、その根源が人物でないわけがありません。その根源の人物は、他の一切の人物の頂点にいる最高人物です。

ヴェーダは、『主（ブラフマン）からすべてが作りだされ、すべてが主に支えられている』と私たちに説いています。宇宙が消滅すれば、すべてはふたたび主の体内で仮眠状態に入ります。ですから、主こそが究極の対象、原因、すべての原因を発生させる原因です。さらに、このような原因が人格のない物体から発生するはずがありません。

ヴェーダは、『主だけが無数に変化し、主はそう望むときに物質自然界を見わたす』と説明しています。主が物質自然界を見わたす以前に物質宇宙はありませんでした。ですから、主の視線は物質的ではありません。物質的な心や感覚は、主が物質自然界を見わたしたときにはまだ存在していませんでした。このように、ヴェーダを証拠として、主には超越的な目と心があることがわかります。物質的ではありません。ですから『主に人格はない』という表現は、主は物質的だとする見解を否定するためにあり、超越的なその人格を否定するものではありません。

ブラフマンは最終的に人格主神を指しています。ブラフマンを非人格として理解することは、物質創造界を非人格として見る、という理解です。パラマートマーは、一切の物質生物体の内に存在するブラフマンの局所的な姿です。すべての啓示経典の証言によれば、最終的に、至高のブラフマンの悟りは人格主神の悟りです。主はヴィシュヌ・タットヴァの究極根源です。

プラーナはヴェーダを補足しています。ヴェーダのマントラは一般の人々には難解すぎるため、女性やシュードラ、高いカーストに生まれたというだけの人には、ヴェーダの教えを会得することはできません。その理由から、ヴェーダの真理をもっとわかりやすくするために『マハーバーラタ』やプラーナが用意されているのです。主ブラフマーは少年のシュリー・クリシュナへの祈りのなかで、永遠なる絶対真理者を親しい身内として持つことのできたシュリー・ナンダ・マハーラージャ、ヤショーダーマイー、そしてヴラジャブーミの住民の限りない幸運を讃えています。

あるヴェーダのマントラは『絶対真理者には足も手もないが、なによりも速く動き、愛情をこめて捧げたものはなんであろうと受けとる』と説明しています。主の手足は一般生物の手足や他の感覚とはまったく違いますが、マントラの後半の言葉は、主が個人として存在していることを明確にしめています。

ですから、ブラフマンは決して非人格ではないのですが、そのようなマントラが別の角度から解釈されると、『絶対真理者には姿がない』と誤解されてしまいます。絶対真理人格主神はあらゆる富をそなえた方であり、ですから、完璧な存在、知識、至福をそなえた超越的な姿を持っています。では、絶対真理者が姿や形を持っていない、と断言できるのでしょうか。

ブラフマンは富を完全にそなえていますから、多様な力を持ち、その力については『ヴィシュヌ・プラーナ』（第6編・第7章・第60節）が、『主ヴィシュヌの超越的な力はおもに3種類に分類される』と述べています。主の精神的な力と生命体という力は上位の力として、いっぽう物質的力は無知から生じた下位の力として分類されています。

生命体という力は、専門用語ではクシェートラギヤ (*kṣetrajña*) の力といいます。このクシェートラギヤ・シャクティ (*kṣetrajña-śakti*) は、主と同じ質でありながら、無知のために物質の力に惑わされ、あらゆる物質的な苦しみの犠牲になります。言いかえれば、生命体は上位（精神的）と下位（物質的）の力の中間の力として位置されているのであり、生命体が物質あるいは精神の力にかかわる度合いに応じて、上位あるいは下位の存在状況に置かれる、ということです。

主は、今述べた下位と中間の力を超えている存在であり、主の精神的力は3つの様相、すなわち永遠なる存在、永遠なる至福、永遠なる知識として表わされます。永遠なる存在はサンディニー (*sandhinī*) の力で機能しています。同じように至福はフラーディニー (*hlādhinī*) の力で、知識はサンヴィトゥ (*samvit*) の力で機能しています。主は最高の力の源として、精神、中間、物質の力の至上の支配者です。そして、この3種類の力は、永遠なる献愛奉仕のなかで主と結ばれています。

このように、最高人格主神は自らの崇高かつ永遠な姿ですべてを楽しんでいます。『至高主に生氣はない』とは、耳を疑う言葉ではありませんか？ 主はすべての力の支配者であり、生命体はその1つの力の部分体です。ですから、主と生命体のあいだには明確な違いがあります。では、どうして主と生命体は同じである、と言えるのでしょうか。『バガヴァッド・ギター』も、生命体は主の上位の力に属している、と述べています。力と力の源の密接な相対関係から見れば、両方とも同じである、とすることができます。ですから主と生命体は、力の源と力という関係で同じだと言えるのです。

土・水・火・空気・エーテル・心・知性・自我は、すべて主の下位の力ですが、生命体は上位の力に属しているので、これらとは別な存在です。これが『バガヴァッド・ギター』（第7章・第4節）の見解です。

主の崇高な姿は永遠に存在し、超越的な至福に満たされています。ならば、そのような姿が単なる物質界の徳性の様式によって作られたものだと言えるのでしょうか。ですから、主の姿を信じない者は信仰心のないよこしまな人間であり、付きあうにも見るにもふさわしくなく、地獄の王に罰せられてしかるべき存在です。

仏教徒はヴェーダに敬意を持っていないために無神論と呼ばれていますが、先に述べたように、ヴェーダの結論に挑む者たちは見せかけのヴェーダの従者であり、仏教徒よりも危険な存在です。

シュリー・ヴァーサデーヴァは、『ヴェーダーンタ・スートラ』のなかにヴェーダ知識をまとめましたが、(シャンカラ・サンプラダーヤを代表とする) マーヤーヴァーダ流派の解説書を読む人は、精神的な悟りの道をさまようばかりです。

宇宙発生の理論は『ヴェーダーンタ・スートラ』で最初に取りあげられています。すべての宇宙現象界は、絶対人格主神が人智を絶する自らのさまざまな力を使って放出されたものです。試金石が発生論の説明にふさわしい例です。試金石はどれほどの量の鉄でも触れることで金に変え、自らも変質することはありません。同じように、至高主は自らの筆舌に尽くせない力であらゆる現象界を作りだせますが、完全かつ不変のままでありつづけます。主はプールナ (pūrṇa) 「完全」で、主から数かぎりないプールナが作りだされても、プールナでありつづけます。

マーヤーヴァーダ流派の幻想論は、『放出の理論によって絶対真理者は質的に変化する』という論法を基盤にしています。もしその説が正しいのであれば、ヴァーサデーヴァは間違っていることになります。これを避けるため、かれらは言葉たくみに幻想の理論を持ちだします。しかし、世界も宇宙創造界も、マーヤーヴァーダ流派の言うような架空の世界ではありません。永遠に存在しない、というだけのことです。永遠に存在しない物事をすべて架空のものとして片づけることはできません。しかし、物質の肉体こそが自分自身である、という考え方はもちろんまちがっています。

プラナヴァ (om・オーム) というヴェーダで使われているオームカーラ (omkāra) は、根源の聖なる音節です。この崇高な音は、主の姿と同じです。ヴェーダの賛歌はすべてこのプラナヴァ オームカーラを基盤にしています。Tat tvam asi (タトゥ トゥヴァナム アシ) はヴェーダ經典で補足的に使われる言葉であり、ヴェーダの根源の聖歌とみなすことはできません。シュリーパーダ・シャンカラチャーリヤは、オームカーラという根源の原則よりもこの tat tvam asi に重点を置いています」。

主はこのように『ヴェーダーンタ・スートラ』について語り、マーヤーヴァーダ流派の理論をことごとく論破しました。(『主チャイタンニヤの教え』では、これらの複雑な哲学的論点をより詳細に説明しています。『シュリーマド・バーガヴァタム』はそれらをすべて明確にしています)。バッターチャーリヤはこじつけと文法を操って自分自身とマーヤーヴァーダ流派を守ろうとしましたが、主は力みなぎる議論を展開させてかれを屈服させました。主は、だれでも永遠に人格主神と絆を持ち、そしてその絆をとおしておこなわれる献愛奉仕という交換が魂の永遠な機能であると断言したのでした。そのような交換の結果は、プレーマー (premā)、すなわち「神への愛情」の達成です。神への愛情にたどり

つくとき、主はあらゆる生物の中樞的存在ですから、他のすべての生物への愛情もおのずと湧きあがってきます。

主はこの3つだけ——神との永遠なる絆、神とのさまざまな行為の交換、神への愛情の達成——がヴェーダ経典で述べられているのであり、それ以外はすべて不必要で、でっちあげられたものだと言いました。

主はさらに、「シュリーパーダ・シャンカラチャーリヤが説いたマーヤーヴァーダ哲学は、ヴェーダにありもしない説明を加えたものですが、それはシャンカラチャーリヤによって説かれるべき定めがありました、なぜなら人格主神にそう命じられたからです」とも説明しました。『パドマ・プラーナ』では、人格主神が主シヴァに「人類を主（人格主神）から逸らすように」と命じたと述べられています。人々がさらに人口を増加させる気持ちになるように、人格主神の正体を覆い隠す必要があったのです。主シヴァがデーヴィーに言っています、「カリ・ユガで、私はブラーフマナの姿を装い、仏教の教えを覆い隠しただけのマーヤーヴァーダ哲学を説くだろう」。

シュリー・チャイタンニヤ・マハープラブの説明を聞きおわったバッターチャーリヤは驚嘆と畏怖の念に打たれ、返す言葉もなく主を見つめるばかりでした。そこで主は、「驚くにはおよびません」と励まし、「人格主神への献愛奉仕こそが人生の最高目標なのです」と言います。そして『シュリーマド・バーガヴァタム』のシュローカを引用し、精神生活、精神的悟りに達して解放された魂でさえ、主ハリへの献愛奉仕を始める、なぜなら人格主神は解放された魂でさえ魅了するほどの方だから、と説明したのでした。

バッターチャーリヤは、『シュリーマド・バーガヴァタム』の *ātmarāma* (アートゥマラーマ) のシュローカ (第1編・第7章・第10節) の説明を聞かせていただきたい、と主に申しでました。それに答えて主は、「まず先生が説明し、そのあとに自分が説明いたします」と言いました。バッターチャーリヤはそれに応えて、そのシュローカを特別な理論を引用しながら学術的に説明しました。当時もっとも世に聞こえた論理学者だったことから、そのシュローカを9通りの教理にもとづいて説明しました。

主はバッターチャーリヤの説明をきいたあと、シュローカに関する学術的な説明に感謝し、そしてバッターチャーリヤの求めに応じて、先の9つの教理に触れることなく、64通りの教理で説明しました。

主からそのアートゥマラーマのシュローカの説明をきいたあと、このような学術的な説明はこの世の人間にできることではないと確信しました。(主が説明した原文は1冊の小冊子ほどになるため、その内容は『主チャイタンニヤの教え』の1つの章に収めてあります)。以前にもシュリー・ゴピーナータ・アーチャーリヤが主の神性についてバッターチャーリヤに理解させようとしたのですが、バッターチャーリヤは主を受け入れることができませんでした。しかし、『ヴェーダーンタ・スートラ』について主の説明とアートゥマラーマのシュローカの説明を聞いて衝撃をうけ、主チャイタンニヤがクリシュナ自

身であったことに気づかなかった自分は、主の蓮華の御足にとりかえしのつかない冒瀆をおかしてしまったと考えはじめました。そしてバターチャーリヤは主に身をゆだね、これまでの無礼を詫びました。心やさしい主はそのようなバターチャーリヤを受けいれました。主はいわれなき慈悲の心から、バターチャーリヤにまず4本腕のナーラーヤナの姿を、次に横笛を手にした2本腕の主クリシュナの姿を見せました。

バターチャーリヤはすぐに主の蓮華の御足にひれ伏し、主の恩寵を授かって主を讃えるにふさわしい約100節のシュローカを唱えました。主はバターチャーリヤを抱擁し、バターチャーリヤは超越的な法悦心に入って意識を失いました。落涙・体の震え・鼓動の高まり・発汗・感情の高まり・踊り・歌・号泣・三昧から生じる8種類すべての兆候が、バターチャーリヤの身体に現われました。シュリー・ゴピーナータ・アーチャーリヤは、義理の兄弟が主の恩寵を授かって目を見張るほどの変貌を遂げた様子を見て喜び、そして驚くばかりでした。

主を讃えて作った100節の中で、次の2つのシュローカが特に重要な意味を含んでおり、主の使命の主旨が集約されています。

1. 私は、主シュリー・チャイタンニヤ・マハープラブとして今姿を現わされた人格主神に身をゆだねよう。主はあらゆる慈悲の海であり、物質的な無執着について、真の知識について、そして主への献愛奉仕について私たちに教えるために今降誕された。

2. 主への純粋な献愛奉仕は時の流れとともに人々の心から忘れさられた。主はその原則をよみがえらせるために今降誕された。そのような主の蓮華の御足に、私は心からひれ伏すものである。

主は、*mukti* (ムクティ) という言葉をヴィシュヌ・人格主神と等しいものとして説明しました。このムクティ、つまり物質存在の束縛からの解放を達成することは、主への奉仕にたどり着くことと同じです。

主チャイタンニヤはバターチャーリヤとのふれあいのあと、南インドに向かって旅立ち、道中に出会った人々すべてを主シュリー・クリシュナの献愛者に変えました。さらにその献愛者たちも多くの人を献愛奉仕の生活に、すなわち主のバーガヴァタ・ダルマの生活へ導いています。やがて主はゴダーヴァリー川のほとりでシュリーラ・ラーマナンダ・ラーヤに会いました。この人物は、オリッサ州の王・マハーラージャ・プラターパルドラの代理としてマドラスの知事の任務についていました。主がラーマナンダ・ラーヤと交わした会話は、超越的知識を深く理解するのにきわめて重要であり、その会話をまとめるだけでも小冊子ほどになりますが、ここではその内容をかいつまんで紹介します。

シュリー・ラーマナンダ・ラーヤは、社会階級からすればブラーフマナよりも低かったのですが、自己を悟った人物です。放棄階級ではなく、政府に仕える高官でした。それでもシュリー・チャイタンニヤ・マハープラブは、超越的知識を理解した高い境地にいたかれを悟った魂として受け入れたのでした。同じように主は、イスラム教の家庭に生まれ

たシュリーラ・ハリダーサ・タークラという古老の献愛者も受けいれています。ほかにも、さまざまな社会・宗派・階級の数多くの人物を偉大な献愛者として迎えいれました。主は私たちの献愛奉仕の質の高さだけを見て判断します。主にとって見かけなどはどうでもいいのです。内なる魂と、その行動に魅かれるのです。ですから、主の使命としての活動は精神的な段階で判断しなくてはなりませんし、ゆえにシュリー・チャイタンニャ・マハープラブが展開した宗教活動、すなわちバーガヴァタ・ダルマは、通俗なおこない・社会・政治・経済発展・あるいはそれに類した生活様式とはまったく関係ありません。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、魂がそなえている純粹かつ超越的な欲求に応えてくれる書物なのです。

主は、シュリー・ラーマーナンダ・ラーヤとゴードーヴァリー川のほとりで出会ったとき、ヒन्दウー教徒が従っていたヴァルナーシュラマ・ダルマ (*varṇāśrama-dharma*) について話しました。シュリーラ・ラーマーナンダ・ラーヤは、4種類の階級と4種類の地位というヴァルナーシュラマ・ダルマの原則に従えばだれでも超越的境地を理解できる、と言いました。主はそれにたいして、ヴァルナーシュラマ・ダルマ制度はうわべだけにすぎず、もっとも高い精神的価値を悟るうえではほとんど役に立たない、と答えます。人生の最高完成の達成は、物質的な執着を断ちきり、無執着の度合いに応じて主への崇高な愛情奉仕を悟ることにあります。人格主神はそのような道を進んでいる人物を評価してくれます。ですから、献愛奉仕はあらゆる知識の頂点です。主シュリー・クリシュナ、最高人格主神が墮落したすべての魂を救うために降誕したとき、主は全生命体の救いを、次のように助言しました。「すべての生命体を放出した源である最高絶対人格主神は、各生命体がさまざまな活動をとおして崇められなくてはならない、なぜなら、目に見えるもの一切は主の力を拡張させたものだからである」。それこそが真の完成への道であり、古今の正しいアーチャーリヤが認めていることです。ヴァルナーシュラマ制度は多かれ少なかれ道徳や倫理原則にもとづいています。そのため、超越性を悟る助けになるとは言いがたく、主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブはその答えを否定し、さらに核心を突いた答えを求めました。

つぎにシュリー・ラーマーナンダ・ラーヤが言及したのは、活動の結果を期待することなく主に捧げることです。『バガヴァッド・ギーター』(第9章・第27節)にこれに関連する助言があります。「することをすべて、食べることをすべて、与えることをすべて、さらには苦行としてすることをすべて、わたしだけに捧げなさい」。活動者が行為の結果を捧げるということは、ヴァルナーシュラマ制度に見られる非人格的側面よりも人格主神の悟りが一段高いことをしめています。しかし、その段階でも生命体と主の関係ははっきりしていません。主はその点を突いて否定し、さらに高い答えをラーマーナンダ・ラーヤに求めました。

ラーヤはそこで、ヴァルナーシュラマ・ダルマを放棄し、献愛奉仕を始めることを提案しました。主はそれを認めませんでした。唐突に自分の地位を捨てるべきではないし、そうしたとしても望ましい結果は得られない、という理由です。

ラーヤは、「物質的な生活観念を超えた精神的悟りを得ることが、魂にとって最高の達成です」と言いました。主はふたたび拒否します。そのような精神的悟りを口実にする不誠実な者たちによって混乱が生じる、という理由でした。やはりこれも一朝で実現できるものではありません。ラーヤはつぎに、自己を悟った人物との誠実なつきあい、そして人格主神の娯楽にまつわる崇高なメッセージを聞くことを提案し、主はこれを歓迎しました。この提案はブラフマージーの足跡に従っています。ブラフマージーは、「人格主神は *ajita* (アジタ)、すなわちだれにも征服されず、だれも近づくことはできない、という意味を表わす名前で見知られている」と言いました。しかしそのようなアジタでさえ、ある手段によってジタ (*jita*・征服された者) になります。それはじつに単純明快です。自分が神であると吹聴するような尊大な態度を捨てるのです。私たちは素直でつつましくふるまい、バーガヴァタ・ダルマ、すなわち最高主とその献愛者を讃える宗教のメッセージについて、自己を悟った崇高な人物から話を聞き、穏やかな生活をおくらなくてはなりません。偉大な人物を讃える資質はだれにでもそなわっているのですが、主を讃えることは教わっていません。人生の完成は、自己を悟った主の献愛者とつきあいながら主を讃えることで達成できます。(クリシュナ意識国際協会はこの目的のために設立されました)。自己を悟った献愛者とは、主にすべてをゆだね、物質的な豊かさに執着していない人物を指します。物質的繁栄と感覚満足、そしてその発達は、どれも人類の無知による活動にすぎません。神と無関係の、そして神に仕える人々と無関係の社会に平和と友愛はありません。ですから、純粋な献愛者たちとの交流を心から求め、自分がどのような社会的位置にいても、かれらの話に忍耐強く、そして従順に耳をかたむけることは絶対に必要なのです。身分の高さや低さは自己を悟る道のさまたげにはなりません。すべきことは一つ、自己を悟った人物の話を繰り返して聞くことです。その人物は教師として、絶対真理者を悟った過去のアーチャーリヤの足跡に従いつつ、ヴェーダ経典をよりどころとして法話をすることでしょう。主シュリー・チャイタンニヤ・マハープラブは、バーガヴァタ・ダルマとして一般に知られている自己を悟るかんたんな方法を私たちに勧めています。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、この目的をかなえてくれる完璧な案内書です。

主チャイタンニヤとシュリー・ラーマナーンダ・ラーヤというこの二人の偉大な人物のあいだには、さらに踏みこんだ高尚な話が交わされていますが、その内容を聞いて理解するには一歩進んだ精神的段階に到達しなくてはならないため、ここではその会話の記述は控えることにしました。シュリーラ・ラーマナーンダ・ラーヤが主と交わしたその先の話題については別の書物(『主チャイタンニヤの教え』)に記載されています。

シュリー・ラーマナンダ・ラーヤはこの会話が終わったあと、主から、政府の仕事をやめてプリーに移り住み、ともに超越的な絆をわかちあうよう助言を受けました。しばらくしてシュリー・ラーマナンダ・ラーヤは知事を辞め、王からの恩給を受けました。そしてプリーの自宅にもどり、主のもっとも親しい側近の献愛者になったのです。プリーには、シキ・マーヒティという名の、ラーマナンダ・ラーヤほどに親しい紳士がいました。主はプリーで、3人あるいは4人の親密な仲間と精神生活の意義について語りあい、そのような精神的な法悦心を味わいながら18年間すごしました。当時交わされた会話の内容は、主の秘書で4人の側近の一人であるシュリー・ダーモーダラ・ゴースヴァーミーによって記録されています。

主はインド南部を広く旅しています。マハーラーシュトラ州のトゥカーラーマという聖者も主から入門式を受けました。聖者トゥカーラーマは主に弟子入りをしたあと、マハーラーシュトラ州をサンキールタン運動であふれさせ、その超越的な流れは今でも偉大なインド大陸の南部で脈打っています。

主は南インドを旅していたとき、『ブラフマ・サムヒター』と『クリシュナ・カルナームリタ』というきわめて重要な2冊の文献を発見しました。この2冊は献愛奉仕に励んでいる人々にとって権威ある研究書で、そして重要な意義を持つ経典です。そのあと主は南インドの旅を終え、プリーにもどりました。

主がプリーにもどったことで、帰りを待ち望んでいた献愛者たちは生きかえり、主は超越的な悟りに支えられた娯楽をくりひろげました。この時期での娯楽では、主がプラターパルドラ王との面会を受け入れたことが特筆できます。プラターパルドラ王は主の偉大な献愛者でしたが、自分では寺院の掃除を主に任された召し使いの一人だと考えていました。王がこのような従順な心がけていることを、シュリー・チャイタンニャ・マハープラブは大いに讃えました。王はバッテリーチャーリャとラーヤに、主と面会できる機会を作ってくれるよう懇願しました。ラーマナンダ・ラーヤやサルヴァバウマ・バッテリーチャーリャといった意志堅固な側近者からの頼みでしたが、主はきっぱりと断りました。サンニャーシーが金中心の人間や女性と親密にまじわるのは危険である、という考えに徹していたのです。主は理想的なサンニャーシーでした。たとえお辞儀をするためであっても、女性は主に近づくことを許されなかったほどです。女性の座る場所は、主から遠くはなれたところに設けられていました。理想的な教師・アーチャーリャだった主は、サンニャーシーに決められた仕事を忠実にこなしていました。神聖な化身であったと同時に、一人の人間としても理想的な気質をそなえていた方です。人々との交わりにおいても疑惑を挟む余地は一切なく、アーチャーリャとしてのふるまいは雷よりも峻厳で、薔薇の花びらよりも柔らかい方でした。主の身近な献愛者の一人、若いハリダーサは一度若い女性を好色な目で見たことがありました。至高の魂でもある主にその欲情が見ぬけないわけがありません。たちまちハリダーサは主に突き放され、自分の過ちを許してもらうために嘆願しましたが、

二度と会うことを許されませんでした。その後若きハリダーサは主との親交を絶たれた悲しみから自殺を選びます。その知らせは主に正式に伝えられました。しかし主はそのときでさえハリダーサの犯した間違いを忘れることはなく、かれはしかるべき罰を受けたのだ、と献愛者たちに語ったのでした。

主は、放棄階級の原則と規律について決して妥協することがなかったため、王が偉大な献愛者であることはよくわかっていたのですが、王が金銭を扱う立場にいるという理由だけで、対面を拒んでいました。主は手本をしめすことで、超越主義者のとるべき行動を知らしめたかったのです。超越主義者は女性や金とは無縁で、そのようなものとのかわりをいつでも控えなくてはなりません。しかし王は、献愛者の巧みな采配をとおして主から慈悲を授かりました。これは、「主に愛される献愛者は主よりも寛大な恵みを初心者に授けられる」ということです。ですから純粋な献愛者は、純粋な献愛者の御足を冒瀆することは決してしません。主の蓮華の御足への冒瀆は、慈悲深い主に許されることがありますが、献愛者の御足への冒瀆は、献愛奉仕の道を高めたいと願っている人には危険きわまりないことです。

主がプリーに住んでいたあいだ、何万何千もの献愛者が主ジャガンナータのラタ・ヤートラーの山車の祭の時期に主に会いにきたものです。そして祭の期間中に主が陣頭指揮をとっていたグンディチャー寺院の清掃は、重要な年中行事の1つになっていました。プリーで主がくりひろげた大勢でのサンキールタン運動は、一般の人々にとって比類のない光景でした。それが大衆の心を精神的悟りに引きつける方法だったのです。主はこの大衆のサンキールタン運動を始めましたが、すべての国の指導者もこの精神的運動を活用し、国民一人ひとりが平和と友好関係を持ちつづけられるよう導くことができます。これこそ、現代社会が進むべき道です。

しばらくしたあと主はインド北部へふたたび旅立ち、ヴリンダーヴァンとその付近一帯も訪ねることにしました。途中、ジャリカンダ（マデヤ・バーラタ地方）の森をとおり、そのときには野生の動物たちがサンキールタン運動に加わりました。虎、象、熊、鹿など、野生の動物たちがともに歩き、主は動物たちをサンキールタンに引きいれました。このできごとによって主は、サンキールタン運動（主の名前を大勢で唱え、讃えること）が広まって野生の動物でさえ平和に仲良く住めるのだから、文化人にできないわけがないことを証明したのでした。サンキールタン運動に加わるのを拒む人は世界のどこにもいないでしょう。また主のサンキールタン運動には、階級、主義、肌の色、生き物などの枠はまったくありません。これこそ主の偉大な使命をじっさいにしめた確かな証です。野生の動物たちでさえこの偉大な運動に参加したのですから。

ヴリンダーヴァンからもどる途中、主はまずプラヤーガを訪ね、そこでルーパ・ゴースヴァーミーとその弟アヌパマに会います。そこからベナレスへ下りました。2ヶ月にわたって主はそこでシュリー・サナータナ・ゴースヴァーミーに超越的科学を説きつづけまし

た。サナータナ・ゴースヴァーミーへの教えの内容は膨大なためここですべてを紹介することはできませんが、以下にその主要部分を紹介します。

サナータナ・ゴースヴァーミー（旧名サーカラ・マルリカ）は、ナワブ・フセイン・サハ政権下でベンガル政府の内閣に仕えていました。しかし主のもとに身を寄せる決心をし、退官していました。ヴリンダーヴァンからもどる途中でヴァーラーナシーに立ちよると、主はマハーラーシュトラ州のブラーフマナの便宜で、シュリー・タパナ・ミシュラとチャンドラシェーカラの客人として滞在していました。当時ヴァーラーナシーは、シュリーパーダ・プラカーシャーナンダ・サラスヴァティーというマーヤーヴァーダ流派の著名なサンニャーシーによって率いられていました。主チャイタンニャがヴァーラーナシーにとどまっていたあいだ、大規模なサンキールタン運動をしていた主に多くの人々が魅了されました。主がどこを訪ねても、特にヴィシュヴァナータ寺院などを訪ねると、数千人もの人々が後につき従いました。主の姿の美しさに魅かれる人もいれば、主を讃える美しい歌の調べに魅かれる人もいました。

マーヤーヴァーディーのサンニャーシーは自分をナーラーヤナと呼びます。当時、ヴァーラーナシーには多くのマーヤーヴァーディーのサンニャーシーが集まっていました。主がサンキールタンをしている様子を見たサンニャーシーのなかには、かれこそがナーラーヤナだと考える人もいて、その噂がプラカーシャーナンダの耳に入りました。

インドでは、マーヤーヴァーダ流派とバーガヴァタ流派のあいだで絶えず論旨の攻防が渦巻いていますが、このときも、プラカーシャーナンダは主がヴァイシュナヴァのサンニャーシーだったことから、知らせにきた従者のまえて主を過小評価し、サンキールタンの説教を宗教的感傷にすぎない、と見下しました。プラカーシャーナンダは、ヴェーダーンタに関する深い造詣を持つ研究者だったことから、従者たちにサンキールタンなどにうつを抜かすことなく、ヴェーダーンタに集中するよう戒めました。

その言葉を聞いたなかに主の献愛者になったブラーフマナがいました。かれはプラカーシャーナンダの批判に不快感をいだき、主を訪ねて不満を吐露しました。「私があなた様の名前を言うと、あの方はチャイタンニャという名前を数回口にしながら強い口調であなた様を非難しました」と伝えました。また、プラカーシャーナンダがチャイタンニャという名前は何度も口にしたのに、クリシュナという名前はただの1度も言えなかったことにも驚いていました。

主はブラーフマナの話聞いてほほえみ、そのマーヤーヴァーディーがクリシュナの聖なる名前を口にできなかった理由を説明しました。「マーヤーヴァーディーはブラフマン、アートマー、チャイタンニャなどの名前をよく口にしていますが、クリシュナの蓮華の御足に冒瀆をはたらいています。冒瀆をはたらいているからこそ、クリシュナという名前を唱えることができません。クリシュナという名前、そして人格主神クリシュナはまったく同じものです。絶対的な境地では、すべてが超越的な至福に満たされているから絶対真理

者とその名前と姿に違いはありません。人格主神クリシュナと、その体と魂にも違いはありません。生物はほんとうの自分ではない『外側の肉体』をまとっていますが、主クリシュナはそのような生物とは違います。クリシュナは超越的な境地にいますから、一般の人々が人格主神クリシュナ、その名前や名声などを理解するのはじつに難しいことです。主の名前、名声、姿、娯楽はすべて超越的段階では同じであり、物質的な感覚をとおして理解できるものではありません。

主がくりひろげた超越的な娯楽を知れば、ブラフマンを悟ったり至高者と一体になったりして得る喜びよりも大きな至福を味わうことができます。その至福を味わってなければ、ブラフマンの超越的喜びを得ている人であっても、主の娯楽という超越的な至福を味わおうとする気持ちは起こりません」

このあと、主の献愛者たちは大規模な会議を用意し、主やプラカーシャーナンダ・サラスヴァティーを含むすべてのサンニャシーが招待されました。会議では、双方の学者（主とプラカーシャーナンダ）がサンキールタン運動の精神的価値について長時間にわたって話しあいました。その要約を紹介します。

プラカーシャーナンダは『ヴェーダーンタ・スートラ』を学ぶことよりもサンキールタン運動を推進している理由を尋ね、『ヴェーダーンタ・スートラ』を読むのはサンニャシーの義務であるにもかかわらず、なぜサンキールタンに熱中しているのか、と問いたしました。

主が謙虚に答えます。「ヴェーダーンタを学ばずにサンキールタン運動を始めたのは、わたしは自分を大馬鹿者だと考えているからです」。主はこの答えの中に、ヴェーダーンタ哲学を学ぶ能力のない現代の無数の愚か者を自ら代表しています。愚か者がヴェーダーンタの研究に没頭しても、社会を混乱におとし入れるだけです。主が言葉をつづけます。「わたしは愚か者ですから、精神指導者はヴェーダーンタ哲学をもてあそぶことを禁じました。主の聖なる名前を唱えなさい、そのほうがあなたを物質的な束縛から救ってくれるのだから、と教えられました。

カリという現代では、主の聖なる名前を唱えて主を讃える方法以外に宗教はなく、どの啓示経典もそのように命じています。精神指導者はわたしに『ブリハン・ナーラディーヤ・プラーナ』から一つのシュローカを教えてくださいました。

*harer nāma harer nāma harer nāmaiva kevalam
kalau nāsty eva nāsty eva nāsty eva gatir anyathā*

[アーディ 第17章・第21節]

わたしは精神指導者にそう命じられたからこそハリという聖なる名前を唱え、今ではその唱名に酔いしれています。この聖なる名前を唱えると、わたしは我を忘れ、時には笑い、

泣き、気がふれたように踊りだします。この方法のためにほんとうに気が狂ってしまったのではないかと考え、精神指導者に尋ねました。師は教えてくださいました、それこそが稀にしか味わえない超越的な感情を作り出す聖なる名前の結果だ、と。それが神への愛情の印であり、また人生の究極点です。神への愛情は解放 (mukti・ムクティ) を超えており、精神的悟りにおける第5段階と言われています。クリシュナの聖なる名前を唱える人は神への愛情という境地に到達し、幸運にもわたしはその祝福を得ることができました」。

主の答えを聞いたマーヤーヴァディー・サンニャシーは、聖なる名前を唱えながらヴェーダーンタを研究してもいいではないか、と尋ねました。プラカーシャーナンダ・サラスヴァティーは、主が以前はナヴァドゥヴィーパできわめて著名な学者としてニマーイ・パンディタの名前で知れわたっていたことを伝え聞いていたので、自分を馬鹿者呼ばわりするには意図があるにちがいないと見抜いたのです。サンニャシーから尋ねられた主はほほえみ、「ご気分を害されることがなければ、あなた様のご質問にお答えいたします」と答えました。

いあわせたサンニャシーたちは、率直に対応する主の態度を好ましく思い、主がどのように答えようと、自分たちは決して気分を害さないと答えました。主が話します。

「『ヴェーダーンタ・スートラ』は超越的な人格主神が語った崇高な言葉、あるいは響きで構成されています。ですから、間違い、幻想、欺瞞、無能といった人間が持つ欠陥はヴェーダーンタのなかにはありえません。ウパニシャッドの真意は『ヴェーダーンタ・スートラ』で表現されており、そのなかにあるのままに述べられていることはどれも栄光に満ちています。ところが、シャンカラチャーリヤの解釈はスートラの意味を正しく伝えておりません。ですから、そのような説明はすべてを台無しにしてしまうのです。

ブラフマンという言葉は全生命体のなかで最大の人物を指しています。それは超越的な富にあふれた方、すべてに優っている方です。ブラフマンは究極的には人格主神のことを指しており、曖昧な説明によって覆い隠され、人格を持たない存在として確立されています。精神界にあるすべてのものは、姿、体、場所、主の身のまわりの品々や環境を含め、超越的な至福に満たされています。すべては永遠に意識を持ち、至福に包まれています。ヴェーダーンタを歪曲して解釈したのはアーチャーリヤ・シャンカラの落ち度ではないのですが、その解釈を受け入れる人に希望の光はありません。人格主神の超越的な体を俗な物体として捉える人は、まちががなく最大の冒瀆をおかしていることになるのです」。

主チャイタンニャは、プリーでバッターチャーリヤに話したほぼ同じ内容をサンニャシーたちに話し、太刀打ちできない圧倒的な議論でマーヤーヴァダーの『ヴェーダーンタ・スートラ』解釈を机上の空論として打破しました。サンニャシーたちは、主がヴェーダーの権化で人格主神御自身であると宣言し、バクティの道に転向して主シュリー・クリシュナの名前を受け入れたあと、主を囲んで食事を楽しみました。サンニャシーたちが改宗したことで、ヴァーラーナシーでの主の評判はいちだんと高まり、主を一目見ようと無数

の人々が押しよせてきました。主はこのようにしてシュリーマド・バーガヴァタ・ダルマの真髄を確立させ、その他さまざまな精神的悟りの学説を一蹴しました。その後、ヴァーラーナシーの住人すべてが崇高なサンキールタン運動に没頭するようになりました。

主がヴァーラーナシーにとどまっているとき、退官直後のサナータナ・ゴースヴァーミーも到着しました。ナワブ・フセイン・サハ政権下のベンガル州政府の重要閣僚の地位にあった人物です。ナワブがサナータナ・ゴースヴァーミーの退官に難色をしめしていたため、州政府から退くときに悶着がありました。そのような困難をくぐりぬけてヴァーラーナシーに来たのであり、主は献愛奉仕の原則についてサナータナ・ゴースヴァーミーに教えを授けました。生命体の本質的な立場、物質的な束縛の原因、生命体と人格主神との永遠な絆、最高人格主神の超越的立場、さまざまな完全部分体の化身として現われた主の完全拡張体、宇宙のさまざまな部分における主の支配、主の荘厳な住居の特質、献愛奉仕とそのさまざまな発達段階、精神的な完成境地に徐々に到達するための規則や原則、さまざまな時代に登場した各化身の様相、そしてその様相を啓示経典の説明に照らして見抜く方法——などを教えました。

主がサナータナ・ゴースヴァーミーに授けた教えは、『チャタンニャ・チャリタームリタ』ではかなりの章を占めているためここでは避け、詳細については『主チャイタンニャの教え』で紹介しています。

主チャイタンニャはマトウラーを訪ね、重要な場所を余すところなくめぐり歩き、ヴリンダーヴァンに到着しました。主は高い地位のブラーフマナの家庭に生まれましたが、サンニャーシーになったため、すべてのヴァルナとアーシュラマを指導する立場にありました。しかし、主はどんな流派のヴァイシュナヴァが食事に招いても応じました。マトウラーではサノーディヤー・ブラーフマナの身分はそれほど高くなかったのですが、主はそのようなブラーフマナの家庭でも招きに応じました。これは、その家庭の主人が偶然にもマードヴェンドラ・プリーの家系の弟子だったからです。

ヴリンダーヴァンでは、24箇所的重要な沐浴の場所・ガータで沐浴しています。また12の重要な森・ヴァナをめぐり歩き、森では牛や鳥たちがまるで旧友を迎えるかのように主を歓迎しました。主は森の木すべてを抱擁しながら、超越的な法悦心に浸りました。ときに意識を失い、クリシュナの聖なる名前を唱えて意識を取りもどしました。主がこのようにヴリンダーヴァンの森を旅していたときに見せた体の兆候は、主だけに見られるもので、言葉では言いつくせません。ここでは大要を紹介します。

主が訪れたヴリンダーヴァンの森でとくに重要な場所は、カーミャヴァナ、アーディーシュヴァラ、パーヴァナ・サローヴァラ、カディラヴァナ、シェーシャチャーイー、ケーラ・ティールタ、バーンディーラヴァナ、バドウラヴァナ、シュリーヴァナ、ラウハヴァナ、マハーヴァナ、ゴークラ、カーリヤ・フラダ、ドゥヴァーダシャーディテヤ、ケーシー・ティールタなどがあります。ラーサ・ダンスがおこなわれた場所を見た瞬間、主は法

悦心に満たされて気を失いました。ヴリンダーヴァンではアクルーラ・ガータを中心に滞在しました。

主に随行していた従者のクリシュナダーサ・ヴィプラは、ヴリンダーヴァンからプラヤーガに行ってマーガ・メラーの時期に沐浴をするよう提案し、主はその言葉に従うことにし、二人はプラヤーガに向けて出発しました。途中、イスラム教の数人のパタン人に出会い、その中に博識なモウラナがいました。主はモウラナやその仲間たちと話をかわし、コーランの中にもバーガヴァタ・ダルマとクリシュナについて説明があることを納得させました。このパタン人たちも献愛奉仕の道に改宗しました。

プラヤーガにもどった主は、ビンドウ・マーダヴァ寺院の近くでシュリーラ・ルーパ・ゴースヴァーミーとその弟に会いました。プラヤーガの人々は再訪した主を以前より敬意を払って迎えました。プラヤーガの別の岸辺に位置するアーダーイラ村にはヴァルラバ・バッタが住み、自宅で主を出迎えることになっていたのですが、主はそこに行く途中、ヤムナー川に飛びこんでしまいました。主は気を失った状態でかろうじて助けられました。最後にヴァルラバ・バッタの住居を訪ねました。ヴァルラバ・バッタは主を崇敬していた筆頭の人物だったのですが、のちに自分の流派としてヴァルラバ・サンプラダーヤを設立しています。

プラヤーガのダシャーシュヴァメーダ・ガータでは、主への献愛奉仕の科学について 10 日間ルーパ・ゴースヴァーミーに説きました。その中で、840 万種類の生物の区分について説明しています。また人間についても説き、ヴェーダ原則に従っている者、結果にこだわって働く者、経験主義哲学者、解放を達成した魂について教えました。主は真実の主シュリー・クリシュナの純粋な献愛者はひじょうに数が少ない、とも説いています。

シュリーラ・ルーパ・ゴースヴァーミーはサナータナ・ゴースヴァーミーの弟で、退官したときに舟 2 隻分の金貨を持っていました。官僚時代に貯めていた巨額の金銭を持っていたということです。そして主チャイタンニャ・マハープラブのもとに行くまえ、財産を次のように分配しました。まず 50% を主と主の献愛者のために、25% を親族のために、残りの 25% を緊急時の自分の出費のために。ルーパ・ゴースヴァーミーはこのようにすべての世帯者が従うべき模範をしめしています。

主は献愛奉仕をつる草に例えてルーパ・ゴースヴァーミーに教え、そのバクティのつる草を、純粋な献愛者を冒瀆する「狂った象」から注意深く守るよう助言しました。さらに、そのつる草は感覚満足、一元論にもとづく解放の境地、ハタ・ヨーガの完成などへの望みという障害からも守らなくてはならない、と説きました。これらは献愛奉仕の道をさまたげます。同じように、他の生物に対する暴力、通俗な利益への願望、世間一般の評判や名声はどれもバクティ、すなわちバーガヴァタ・ダルマの発達にとって有害です。

純粋な献愛奉仕は、このような感覚満足への願望、利益に対する欲望、一元論的知識とは無縁でなくてはなりません。あらゆる肩書きを捨て、やがて気高く純粋な人物になるとき、その無垢な感覚を使って主に仕えられるようになるのです。

感覚を楽しみたい、至高者と一体になりたい、そして神通力をつけたいと願っているかぎり、純粋な献愛奉仕の境地にたどり着ける可能性はありません。

献愛奉仕は2種類に分けられます。すなわち、初期的段階での修練、そして心の内から自然におこなう段階です。自発的な境地に入ると、精神的な執着心、感情、愛情、さらには地上の言語では表現できないほどのさまざまな献愛奉仕の段階によって献愛奉仕をいっそう高めることができます。著者は献愛奉仕の科学について、シュリーラ・ルーパ・ゴースヴァーミーが著わした『バクティ・ラサームリタ・シンドウ』を典拠として、『献身奉仕の海』のなかに解説しています。

超越的な献愛奉仕には、主との関係にもとづく5段階の感情交換があります。

1. 物質的な束縛から解放された直後の自己の悟りをシャーンタ (*śānta*)、中間の段階といいます。

2. そのあと、主の内的富について超越的な知識を高めた時点で、献愛者はダーッシャ (*dāśya*) の段階で奉仕をします。

3. ダーッシャの段階が高まると、主とのあいだで尊敬の念で結ばれた友愛関係が築かれ、そのあとに同じレベルでの友人感情が表われます。双方ともサーキャ (*sākhya*) の段階、すなわち友人関係での献愛奉仕と呼ばれます。

4. その段階を超えると、主に対して父親としての感情を持つ段階に入り、それをヴァートウサリヤ (*vātsalya*) の段階といいます。

5. この段階の上に夫婦愛の境地があり、先の4段階はどれも質的に違いはありませんが、この段階が神への愛情をきわめた境地です。神との夫婦愛の段階をマードウリヤ (*mādhurya*) といいます。

このように主はルーパ・ゴースヴァーミーに献愛奉仕の科学的知識を授け、見失われていた主の崇高な娯楽の場所を発掘するよう託しました。そのあと主はヴァーラーナシーにもどり、先に紹介したとおり、サンニャーシーたちを救い、ルーパ・ゴースヴァーミーの兄に教えを授けたのでした。

主が文字として残した教えは8つのシュローカだけで、それは『シクシャーシュタカ・』 (*Śikṣāṣṭaka*) として知られています。主のその他の崇高な教義は、主要な従者、ヴリンダーヴァンの6人のゴースヴァーミー、そしてその従者たちが著わした膨大な文献として残されています。チャイタンニャ哲学の教義は他のどのような教義よりも豊潤であり、ヴィシュヴァ・ダルマ (*viśva-dharma*) ・ 普遍の宗教として広がる力をそなえ、現代のための「生ける宗教」として認められています。筆者はこれらの精神的主題が、バクティシッダーンタ・サラスヴァティー・ゴースヴァーミー・マハーラージャ、そしてその弟子といっ

た熱意あふれる聖者たちによって真摯に取りあげられていることを、心から喜ばしく思っています。主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブによって着手されたバーガヴァタ・ダルマ、あるいはプレーマ・ダルマが開花する日を、一日千秋の思いで待ちつづけるものです。

主が詠んだ8つのシュローカ

1

シュリー・クリシュナ・サンキールタンに栄光あれ。それは、長い歳月にわたって積もった心の埃をぬぐいさり、誕生と死を繰り返す条件づけられた生活の猛火を消しさってくれます。このサンキールタン運動は祝福そのものであり、恵みの月となって光明を放ち、無上の祝福を全人類にあまねくそいでくれます。あらゆる超越的知識の真髄でもあり、崇高な喜びの大海をさらに拡大させ、私たちがいつも待ちのぞんでいる甘露をこころゆくまで味あわせてくれます。

2

主よ。あなた様の聖なる名前だけが生命体にあらゆる祝福を投げかけてくれます。だからこそあなた様は、クリシュナやゴーヴィンダといった何千何億という名前をお持ちです。そしてその崇高な名前にご自分の超越的な力を込められました。それらの名前を唱えるための厳格な決まりはありません。主よ。心やさしいあなた様は、私たちが聖なる名前を唱えてあなた様にわけなく近づけるようにしてくださいました。しかし、あまりにも不運なわたしは、それらの名前に魅力を感じることはできません。

3

主の聖なる名前を唱えるには、自分を路傍の草よりも低い人間だと思いつつましい心でなくてはなりません。木よりも忍耐強く、いつわりの名声を捨て、だれにでもあらゆる敬意を払う心がまえが必要です。そのような心境にあつてこそ、主の聖なる名前を唱えつづけることができます。

4

全能の主よ。私には、富を蓄える望みも、美しい女性を求めることも、従者を持つ望みもありません。何度生まれかわっても、あなた様のいわれなき献愛奉仕をすることだけが私の望みです。

5

マハーラージャ・ナンダの子・クリシュナよ。私はあなた様の永遠なる召し使いです。にもかかわらず、いつのまにか生と死の海に転落してしまいました。どうか、この海から救いあげ、一粒のチリとしてあなた様の蓮華の御足に付けてください。

6

主よ。あなた様の聖なる名前をとえながら、あふれでる愛情の涙でわたしの目が飾られるのはいつのことでしょうか。あなた様の名前を唱えて涙にむせび、体中の毛が逆立つ日は、いつ訪れるのでしょうか。

7

おお、ゴーヴィンダ！ あなた様との別離の苦しみに打ちひしがれた私には、ほんの一瞬でさえ数十年、いいえ、それ以上の歳月に思えます。目からは涙が豪雨のように流れおち、あなた様のいない世界をむなしく思うばかりです。

8

主クリシュナだけが私の主人であることはよく知っています。ですから、私を手荒く抱きしめてくださろうと、あるいは姿を見せずに私を嘆き悲しませようと、私の主人であることに変わりありません。主は、すべて思いどおりに振舞うことができる方です。なぜなら、主はなにがあっても私が崇める主人なのですから。